



Carnival of the white forest

みんなのミカタ

峯村 明

Carnival of the white forest

みんなのミカタ

はじめに

ミカタの災難

中学校文化祭でクラス対抗合唱コンクールをやることになった。ミカタのクラス、女子たちはおおいに張り切るが、変声期まっただなかの男子の反応は鈍い。クラスは力を合わせて新境地へチャレンジする前に、分裂の危機に――！

ユキエの決意

演奏する曲目は？ クラス全体の練習は誰が仕切る？ 誰がピアノ伴奏を？ だいたい男子はやる気がないし！ 次々と問題が浮上するものの、でも他のクラスに遅れをとりたくない！ さあどうする！？

5時間目 陰謀の時間

気だるい5時間目は国語の授業。やる気がないはずの男子たちは自分らのリーダー・ミカタの足を引っ張ろうと、せっせと陰謀を巡らす。

練習開始

ユキエのかつてのピアノの教師・安部先生は、合唱にも造詣が深かった。ミカタは安部先生との会話から合唱コンを音楽コンに変更するよう、クラスと生徒会を動かし、ついに練習にこぎつける。

ナオトを返せ！

春から学校に来なくなった男子生徒がいた。彼、稲田くんが不登校になった原因を男子は誰も知らないという。ミカタは稲田くん本人から話を聴くに及び、ショックのあまり寝込んでしまう。

白い森のカーニバル

傷つけた者と傷つけられた者。謝罪と拒否。それぞれの気持ちの平行線を、音符がつなぐ。坂東先生の少年の日の初恋も、また。

あとがき

はじめに

五線譜はただの平行線。

音符のひとつひとは黒くて、無表情。

なのに、五線譜の上で、音符がひとつひとつ、つながっていくと、あら不思議。

なにもなかった場所に次々と色が生まれ、心が動くのを感じます。



中学校文化祭でクラス対抗合唱コンクールをやることになった。ミカタのクラス、女子たちはおおいに張り切るが、変声期まっただなかの男子の反応は鈍い。クラスは力を合わせて新境地へチャレンジする前に、分裂の危機に――！

001.

「ことしの文化祭は、クラス対抗で、合唱コンクールやることに、決まりました！！」

文化祭実行委員の松井春奈ちゃんが黒板の前で、元気いっぱいにそう宣言した。丸い顔がぴかぴかと輝いている。そりゃあそうだろうな。

『みんなで 力を合わせ 新境地へ チャレンジ！』、という、すばらしいスローガン考えたのは、となりの二年A組の文化祭実行委員、竹野内侑名(れいな)さんだ。

全校生徒から募集してまずクラス投票で上位二点にしぼり、それから全校投票でみごと一位にかがやいた。

うちのB組を代表したのは惜しくも(なんともないが)五位に終わった。

松井委員が涙を流して悔しがったのは、なにかと竹野内委員と張り合っていたからである。侑名(れいな)に負けた、と思ったわけだ。

やがて、一矢を報いるチャンスが巡ってきた。それが『力を合わせるべき新境地とは？』だった。

つまり、わが校の文化祭において、過去にやったことがなく、みんなで力を合わせてチャレンジできる新しいイベント、それを考えなくちゃならなかった。

僕はさんざん考えたあげくアンケート用紙に『大なわ』と書いたが却下された。芸がない、という理由で。

芸がないとはなんだ、大なわむずかしいんだぞ、どういう順番で人を並ばせるとか、間隔をどれくらいあけるといいかとか、なわを回すタイミングとか。

でも松井春奈はじつに口が達者だから、なにを言い返されるかわからないし、「これ書いたのどれ？『なわ』って漢字で書けないの？」といいやがってみんなを笑わせたので、しかたなく僕もいっしょに笑うことになって、抗議できなかった。

それはともかく、B組から出された文化祭イベント案が春奈の考案による『クラス対抗・合唱コンクール』で、一見似たようなA組の、『クラス対抗・ダンスコンクール』に大差をつけて選ばれたのだから、彼女の丸顔がぴかぴかと輝くのも当然なのだった。

春奈は伶名さんに勝つ(たわけでもないが)で大満足だし、自分の案が全校のイベントに取り上げられて大得意である。

女子たちも「わあい！春奈やったあ！」と大喜びだ。よかったよかった、選ばれて。がんばれよ。

なんとなくしらけていたのは、芸と知性に欠ける大なわが却下された僕だけじゃない。

たいていの男子は「合唱か～」である。

たいていの男子は声変わり中だからである。声がかわりつつあるということは、ようするに、歌いたくても歌えないということなのである。

たぶん、これは女子にはわからないだろう。我々男子に女子の生理がわからないのと同じように。

ぼーっとしらけてると、「美形くん！！」と呼ばれた。

美形。それは文字通り、僕のことだ。ミカタ、と読む。

なんだなんだ、僕が大なわって書いたのがばれたのかととっさに身構えると、春奈委員がにっこりと笑っていた。そして、「いいわよね？」といった。

いいわよねってなにがいいんだ？ と隣の席の富永くんをつつくと、「え、ちゃんと聞いてるよ。だいたいなことなんだから」と、そっぽを向かれた。

覚えてろ 富永、もう消しゴム、貸してやらないからな。

……と、にらんでいると「はい！ じゃ、けってい！」と春奈の大声がひびいた。ごめん、富永くん、なにが決定したのかおしえて。

彼は細い目でじろっと僕をみた。「ミカタ、おまえが男子のパートリーダーなんだってさ」

僕は思わずイスを蹴って立ち上がった。「かってに決めるなよ！ パートリーダーってなんだよ！？ 僕は合唱のがの字も知らないよ！！」

「かってに決めーてなんかいなーいよー、さっき男子全員に聞いたじゃーん、パートリーダーやりたくない人は手をあげてーって」

「ええっ？」

「あげなかったのは、ミカタくんだけー」春奈は胸をはって鼻をふくらませ、勝ち誇っていた。

い、いんぼうだ！ いくら僕が美形だからって！！

「なにつまんないことってんよ、もう決まっちゃったんだから、ごちゃごちゃほじくりかえさないでよね！！！」

僕は周りをみた。誰か救いの手をさしのべてくれてもよさそうなものじゃないか、なんでみんな知らん顔してるんだ！？

すると、救いの手は意外な方向からきた。

「ちょっと！ 男子たち！ いいかげんにしなさいよ！ なんでもかんでもみーんなあたしたちに決めさせて、知らん顔って、ずるいんじゃない！？」

そうよそうよ、ずるいわ！ と僕は心の中で旗を振って声援を送った。

緑山鈴華さんはたのもしいクラス委員だ。もうひとりのクラス委員、影浦優也は緑山さんのカゲミたいなものである。

そうなんだ。二年B組は、とにかく女子の精力が、いや、勢力が、圧倒的に強い。なんでもかんでもみーんな自分たち女子だけで決めたがる。

男子の発言権など、あってない。つまり、無い。

もしもなにか発言するなら、期末試験勉強のような念入りな準備(やったことないけど)と、いのちをかける覚悟と、逃げ道の確保が必要だった。

だというのに、ぼくはそのうちのなにひとつ持たずに「かってに決めるな！」とぶちあげてしまった。

女子の決定にうっかり異を唱えてしまったのだ。

男子はあてにならないし、女子は口にできなければ文学的表現も不可能なくらい、こわい。

すでにそこそこで「かってに決めるなって、何様よ」と異様な雰囲気になっている。ことここにいたれば頼みのつなは、緑山さんだけだった。

だが緑山さんは女子だった。「合唱ってね、みーんなで力を合わせないと、ダメなのよ！『みんなで力を合わせて』ってスローガンに、これほどぴったりのもほかにないわ。だから男子！ 私たちの足をひっぱらないでちょうだいね！！」

男子はこそこそと顔を見合わせ、こそこそとささやきあった。んなこといってもなあ……

「ミカタくん！？ いいわね！？ このなさけない男子たちの面倒、ちゃんっとみるのよっ！！」

あまりの迫力に僕は反射的に胸を張って、「はいっ！」といいお返事をしてしまったのだった。

*

「ミカタ～」

「おまえってやつは～」

「ば～か」

「プライドとかないの～？」

僕は体育の時間の前に男子の前で土下座した。「おねがいします。協力してください」

われながら情けないと思った。プライドも少しはあるからそんなことするのは悲しかったが、カレンダーを見ると文化祭まで一ヶ月だ。

まとまってもらって、練習してもらわなきゃならない。そういって男子だけで練習してみようと昼休みに集合かけてみたのだが、集まったのは僕も入れて男子十六人中、六人だけ。そりゃないだろ？ の人数だった。

「おまえは人徳に欠けるからなー」といわれればそれまでである。ドリルノートの提出はたまにしかしてないし、宿題はてきとう、忘れ物もたまにする。足も遅い。給食できらいなものはきっちり誰かに押しつける。

あれもこれもとリストアップされてその数、十五を数える。僕を除いた男子全員分か――。

少ししかなかったプライドがちりぢりに破れそうだ。僕はそんなになんにもない、しょうもないやつだったのか。

ショックでからだは震え、世界が涙でくもる。どうしたらいいんだ。頭の中がからっぽになって、なんにも考えられない。

「ちょっと～！ あんたたち～！」

頭の上のでかい声は松井春奈だった。

「あんたたち！ ミカタくんだけ責めるって、どおいう了見よ！？ いい！？ 合唱コンは全校行事なの！ クラス対抗なの！！

みんなで協力するなんて、当たり前じゃないの！！ リーダー決めるときは知らん顔、決まったら決まったで、無視して協力しないって！ なに考えてんの！？ だから男子はダメなのよっ！

もっとやる気出さないよ！ ミカタくんもミカタくんよ、もうちょっと何とかならないの！？ まったくもおおおおっ！！」

松井春奈はまくしたてて、牛のように雄たけびをあげた。

授業開始のチャイムはとっくに鳴っているが、僕の土下座と松井春奈の咆哮とが授業の邪魔をしていた。

体育の坂東先生が頭をかきながらそのへんをのしのしと歩き回っている。僕はきっとあとでこっぴどく叱られるだろう。坂東先生は柔道の有段者で、顔は一塁ベースのように四角く、地獄の底からひびいてくるような不吉な声で、怒るとものすごくこわい。

つい最近、掃除をさぼってた三年の男子を五、六人、まとめてぶっとばしたっていう話だ。さすがに松井春奈や緑山鈴華の比じゃあない。

ほんとに腰が抜けるくらい、こわいんだ。

その坂東先生が、「あのなあ」、とおっしゃった。

びくっと飛び上がったのは僕だけじゃない。男子全員だ。松井春奈はじめ、遠巻きに様子をうかがってた女子たちはびくっ、どころか、びくともしていなかった。

「あのなあ、今は体育の時間だから、そういうことは教室に帰ってからゆっくりやれ。と、言いたいが。なんだって？ 合唱コンだって？」

そうなんです先生、合唱コン！ 私の案が通ってね、としゃべりだす松井春奈を坂東先生はでっかい手で、まあまあ、とおさえた。女子の体育はほんとは西坂という女の先生で授業は別々なんだが、今日は家庭の事情とかで休みなので、坂東先生が男女両方を面倒見てるのである。

「こら、ミカタ、立て」とおっしゃる声には、顔を引きつらせて先生をみあげた。

ぶん殴られるのかと思ったが、坂東先生は意外と落ちついた顔をしておられる。重ねて、「ほら、さっさと立たんか」とおっしゃるので、僕はそろそろと立ち上がろう、とした。が、正座してた足はしびれが切れて立てない。むりやり半分立ち上がったところで、足に力が入らず、そのままですんと尻もちをついて両脚でばんざいしてしまった。

あちこちで、ぷっ、と噴き出す音。みっともなさもここにきわまれり、である。

坂東先生は「まあ、無理するな」とおっしゃった。「ところで……合唱コンだって？ 面白そうじゃないか！」

男子女子問わず、みんなが「えっ！？」とハモった。「じつはなあ、俺、中学時代、合唱部というところで合唱やってたのだ」

ふたたび「ええっ！？」とみごとな和音。柔道有段者でごついの代名詞のような坂東先生に中学時代があって、合唱をやっていたとは。次々と繰り返される衝撃の告白にみんなはおろおろと動揺した。

「なにをおどろいてる。そんなに俺の歌声がききたいか」と、僕に顔を近づけてこられたので、僕はうなずくべきか、首を横にふるべきか迷って、首をぐるぐるまわすという折衷案をとった。

「うむ。正直だな、ミカタ。しかしだな、本当なんだぞ、合唱やってたというのは」

うっそだあ、というのも、ほんとーですかー？ というのもおそろしい。そのおそろしさといったら、前門のトラ後門のオオカミのごときである。

リアクションに困ってしーんと静まり返ってしまった僕らの前で、坂東先生は腰に両手をあて、空、ではなく体育館の天井をみあげ、
「そう——幼いころから歌は俺の友だち。心の友だった——」遠い目でつぶやいた。

005.

少年時代。その時代の坂東少年は玉を転がすような歌声を持っていた。両親がクリスチャンだったため、教会の聖歌隊に入り、聖歌を歌っていたのだという話を聴かされたときは、みんないっせいに目を見張り、あるいはぱちぱちさせ、口元をむずむずさせたものだ。だって、つっこみどころだらけである。

両親がクリスチャン。

聖歌隊。

わが市立荒山中学校の隣は荒山神社で、周囲は一面の水田。ところどころに古い農家が点在する。田園地帯から幾分離れたところに新しい住宅地はある(僕はそのあたりに住んでる)が教会なんてない。もちろん聖歌隊もない。先生のお話をあたまた思い描こうにも……あまりにも現実ばなれしててなーんにも、思い描けない。

背景を描くこともできなければ、そこに立って聖歌を歌う主人公・坂東少年を描くことはもっとむずかしかった。

「美しいメロディに乗ってハーモニーに加わると音とともに心が震え、リズムを感じると手足がダンスを踊りたがった。俺は歌うことが本当に好きだった。小学校五年生になったとき、初めてクラス替えがあった。内気な俺は不安でたまらなかったが、俺には心の友、歌があった。

クラスの男子らがボールを投げあったり蹴りあったり熱中するのと同じように歌うことに熱中した。俺が歌いだすと、はじめびっくりして遠巻きにしていた連中が次第に近くにやってきた。ほとん

ど女子ばかりだったな。彼女らは目を輝かせ、あるいは涙ぐみながら俺の歌を聴いた。俺にしてみればごくしぜんな光景だったのだが、男子には受けなかった。

だがある日、ある男子に声をかけられた。俊(しゅん)くんという名だった。俺が子どもだった時分、えらくオシャレにまた賢そうに響いた名だった。真面目で、陽気な性格で、そして俺に負けず劣らずのなかなかの美男子だったのでクラス一の人気者だった。そんな彼に、『幸太郎くん』、と声をかけられたものだから俺は、さっと緊張した。いったい何事だろうか。

『幸太郎くん、いっしょにキャッチボールしようよ』

俊くんはそう言ってにっこりと笑った。白い歯がまぶしかった。

俺は歌には自信があったが、運動オンチだった。小さいボールを投げあうキャッチボールなんて苦手中の苦手。しかしクラス一の人気者俊くんがにこにこしながら誘ってくれたのだ。断る手はなかった。もしかしたら仲良くなれるかもしれない。

俊くんは近い距離からそおっとボールを投げてくれた。これなら運動オンチの俺でも、慣れないグラブを使ってキャッチできる。緊張してドキドキしていた俺はほっとして、嬉しくなった。俺が投げるへろへろしたボールを俊くんは笑ってキャッチに走り、そしてそおっと、キャッチしやすいところへ、投げ返してくれた。

そうこうするうちに見物人が増えてきた。女子ばかりだ。みんな俊くんに声援を送ってる。そうだよなあと俺は思った。優しいもんな、俊くんて。だから人気があるんだろう。

『うまいじゃないか幸太郎くん。ちょっと難しくしてみようか』俊くんはそう言って数メートル、後ずさりし、そこからぼいっとボールを放ってきた。俺はちゃんと受け取り、へろへろと投げ返した。彼が数メートル遠くへ行った分、投げ返すのはさらに難しくなった。ボールは途中で失速して落っこち、ぽてぽてと転がり、俊くんは笑った。見物の女子たちも笑ってた。

キンコンカンコン……と、昼休み終了のチャイムが鳴って俺の注意がそれた時、俊くんが投げたのはそれまでになかったような強い、スピードのあるボールだった。あわてて出したグラブの端に当たったボールは弾かれてあらぬ方角へ飛んでいった。

俺たちは校庭の隅でキャッチボールをしてた。校庭の回りは初夏の葉桜がうっそうと茂っていた。桜の木の根元に白いボールを見つけた俺は喜々として駆け寄った。

と、その時。木の影から人影が現れた。ひとり、ふたり、三人四人……どれも見たことのある顔、クラスの男子たちだ。あれ？ 次の授業は算数じゃなかったっけ？

なんでみんなこんなところにいるんだ？ ねえ、俊くん？

振り返ってみると彼はさっきボールを投げたところに立ったままだった。その向こうに校舎に戻っていく女子の最後尾の背中が見えた。

歌がうたえるくらいで、いい気になるなよ、と誰かが言った。みな、口々にになにか言っていたが、聞き取れたのはそれと、ミサキちゃんと俊を邪魔するな、と。

次々と手が伸びてきた。服をむしり取られながらぼんやりと俺は考えた。女子のなかにミサキちゃんて子がいたような気がするがどの子だっけ。誰だかわからないミサキちゃんと俊くんを、邪魔した？ 俺が？ そうなのかい？

彼はさっきボールを投げたところに立ったまま涼しそうに風に吹かれていた」

小学校五年の時のことだ、と思う。と坂東先生は言った、

「校庭の隅で丸裸にされてどうやってうちへ帰ったのかまるで覚えていない。その事件の後、俺は病気になり、一家で引っ越したらしい。気がついたら知らない町にいて、知らない名前の中学に入ることになっていた」

006.

中学校の入学式の日、俺を迎えてくれたのは合唱だった。女子の声は高く低く澄み、男子の声はより低いところで女子の高音を支えていた。

我知らず、心臓がどくと脈打った。

人の声とはなんとやさしく温かいものか。厳寒の雪山のように冷たく固く凍りついていた俺の心は、心臓の一打によってみるみる生気を取り戻した。いっしょに、ともに歌いたい、音のなかに加わりたい、泣きたいほど狂おしく俺はそう熱望した。いまいちど、声のかぎりに音楽の一部になりたい！

心の奥底からの激しい願いのまま、今まさに歌わん、として俺は愕然とした。声が出ない。

『あなたは本当に歌うことが好きなのですね』

桜のつぼみを三分咲きから五分咲きへとほころばせる声があるとすれば、それは川澄先生の声である。中学校の音楽の先生は川澄まりこという名前だった。なんと美しい名前だろう。

川澄先生はこうおっしゃった。『坂東くん。男の子なら変声期はかならずめぐってくるもの。避けては通れない。けれども、歌うことに必要なのは、声だけではないわ。それは何かしら。あなたはど
う思う？』

歌うことに必要なものはと問われ、俺はしばし沈思黙考した。お前らは何だと思う？

みんなはざわめいた。うーむ。僕は首をかしげ、先生の一塁ベースのような四角い顔を見上げた。まあ、少なくとも、歌うのに顔の形は必要ないよなあ。坂東先生はあいかわらず遠い目をして
いた。「お前らは何だと思うか」、とっておきながら、答えを期待してる様子じゃあなかった。

「答えに困った俺に、川澄先生は澄んだ声でおっしゃった。歌いたい気持ち。ただそれだけです
よ、とな。先生ばかりでなく、合唱部の面々も声の出ない俺を受け容れてくれた。先輩の男子部員
は『声の出ない時期などほんのいっときだけだ。その時期を耐えることができれば、またかならず
歌えるようになるよ』と、俺の肩を叩いてくれた。楽しかった。歌えないが楽しかった。みんなでも
にひとつの音楽を作ろうとしていた。俺もそのなかのひとりだった。ときには部員同士の行き違いや
衝突もあったが、優しく、時に厳しく指導された川澄先生の姿をみればみな、再びひとつになる高
みを志したものだだった」

「そしてあの日。中二の一学期の終わりの日。梅雨が明けたばかりの終業式の朝、教室に行っ
てみると、女子たちがひそひそきゃあきゃあと、目を輝かせ眉をひそめ、盛り上がっている。なんの話
題なのか、さっぱりわからないが、困惑と好奇心とが入り混じった、みょうちきりんな雰囲気だった。

おおかたの女子が集っているなか、ひとり超然と読書に没頭している女子がいた。ふと本から顔をあげた彼女、ヨシコさんの知的な目と俺の目とがあった。

『音楽の川澄先生が学校やめるそうよ。噂では、結婚するんですって』

けっ——

『相手の人は安部さんというらしいわ。そして。噂では、先生のおなかには赤ちゃんが』

目の前が暗くかげっていく。ヨシコさんの知的で冷静なまなざしが俺を見ている。あとで聞いたところによると、ヨシコさんは俺が後ろの方へ背中から倒れていくのを見ていて、仰向けに倒れた俺の肩やら腹やらをつんつんと指先でつつき、反応がないのを確かめてからおもむろに俺を小脇に抱えたのだという。それからどうしたかという、ずるずると俺を引きずって廊下へ出て行ったのだ、と。つまり、ヨシコさんは気を失った俺を保健室へ運んでくれたのだ。俺より二十センチも背が高く、二回りは体格の違うヨシコさんであったればこそ可能なワザであった」

そこで、坂東先生は、ああ、と深いため息をつき、僕らは女子も男子もみんな息を詰めて、話の続きに耳を傾けた。

「残酷な夏だった。俺は歌への情熱を失くし、生きる喜びをも見失った。いや、失ったのはそれだけではない。美しくたおやかで気高い川澄先生への憧れ。尊敬。そして……初恋。今思えば川澄先生とて一個の人間、結婚されて子を成されることになんの不思議もない。しかし中学生の俺には到底、許しがたく、受け入れがたいことだった。純情このうえない俺の魂はいちじるしく傷つき、傷つけられたと感じ、のたうち回るようにして泣き叫んだ。泣いて泣いて泣いた。そうしなければ自分がどうにかなってしまう。気が狂いそうだった。そして——ひとぼんのうちに、俺の喉は潰れてしまっていた」

007.

ひいいい、と細い悲鳴があがった。ぼ、僕じゃないぞ。

(ユ、ユキエちゃん？ 大丈夫？)

悲鳴の主ユキエちゃんは体操着のおなかのあたりを持ち上げて口に押し当てていた。そして、大丈夫、というようにこくこくとうなずいているが、すっかり涙目になってる。

坂東先生は腕組みを解いてぼりぼりと頭をかいた。

「まあ、変声期の真っただ中という繊細な時期に派手に泣き叫んだせいでな、かつて聖歌を奏でていた喉をダメにしてしまった。

そしてその夏休みが終わるころ、夏の終わりの風が吹く川辺でヨシコさんにぼったりと出くわした。終業式の日保健室へ運んでくれた札を言わなければと思い、おずおずと声をかけると、ヨシコさんはふっと笑顔を向けてきた。そしてこう言った。

『坂東くん、あんな倒れ方したらまずいよ』。

なにがまずいんだい、と俺は尋ねた」

「坂東くん、頭から倒れた。頭を強く打ちつくと大怪我する。だから柔道では頭を守るためにまず受け身を習うのよ」

「……と、そんなわけで合唱部を辞め、ヨシコさんに誘われて柔道部に入ったのだ。しばらくするとずんずんと背が伸び出し、高校生の時には大きな大会に出場するまでになった。そして大学で体育教師の資格を取り、こうしておまえたちの前に立っている。そして、合唱コンクールと聞いてどきどきしているのだ」

坂東先生はそう言って目を輝かせた。嬉しそうだった。

008.

体育の時間は結局、ほぼ四十五分間に及ぶ坂東先生の自伝語りをもって終わったが、放課後、春奈たち数人の女子が先生のもとへ押しかけていった。もっとお話ししてくださいと言って。しかし野球部の練習を見なきゃならないからと追い返されてきた。坂東先生は野球部の顧問なのだ。

「ねえ、おかしいと思わない？」

と、緑山鈴華が誰にともなく言った。二年B組の教室には歌の練習をしようという有志が数人居残っていた。有志のはずだが僕だけは強制参加である。

「あ。鈴華もそう思う？」

「……春奈も？」

鈴華と春奈は顔を見合わせ、互いの顔を見つめあい、やがて意味ありげにゆっくりとうなずいた。なるほど、鈴華と春奈の顔がおかしいのか？

とたんにお尻にどかつ、と、きょうれつなキックが飛んできた。春奈のやつが制服のスカートをはひるがえて回し蹴りを放ってきたのである。な、ななななにするんだよ！！

「美形、あんた今、あたしたちの顔がおかしいって考えたでしょ！？」

か、かかか考えてみたこともありません！！

「ウソつくんじゃないわ！ あんたは考えたことがぜーんぶ顔に出るんだから！！」

頭ん中でなに考えたっていいじゃないかーほっといてくれよー、と僕は泣きながら訴えたが彼女たちの話題はすでにほかのところへ移っていた。

「坂東先生、自分は運動オンチでキャッチボールなんて苦手だって言ってたよね。そんな人がなんで野球部の顧問なの。私はそこがおかしいと思う」、

と鈴華が問題提起をすれば、春奈が、

「あたしはそもそも、先生が聖歌隊で聖歌歌ってたってのが信じらんない」、と根本的な不信を投げかけた。

そうだよねえ、うんうん、あたしも坂東の話にはぜんぜんぴんと来なかった、あたしもあたしもー、と次々と火の手があがった。これはもしや炎上に突入するのだろうか。僕の胸はどきどきと気持ちわるく高鳴った。

と、教室の戸ががらりと開いて、つかつかと誰かが入ってきた。女子たちのおしゃべりがぼたりと止んだ。

「あと五分で下校時間よ。歌の練習はどんな様子？」そう言ってみんなをぐるっと見回したのは二年B組の担任、百地先生である。おかっぱのような髪型に細い黒い縁のメガネをかけ、せかせかせかせかと動き回る、国語の先生だ。「どう？ 松井さん？」

名指しされた春奈は肩をすくめ、ぺろりと舌を出し、「てへっ」と頭をかく仕草をした。たった今まで目をつりあげて「信じらんないよね？ 信じらんないよね？ ね？ ね？」とみんなをあおっていたのが信じらんないような豹変ぶりだ。

009.

「えーとー、まず何を歌うかってーところなんですけどー」

「あらまっ。曲目決まってないの！？」

「ええまあ」

「文化祭までひと月半……条件はどのクラスもおんなじだけどねえ……春の運動会ではC組に優勝もってかれちゃってるし、一学期のテストの総合得点はA組がトップだったし。全校で優勝はムリでも二学年三クラスで一位くらいは、わがB組で欲しいわよねえ」

「も、もちろんです先生！！」

「松井さん、文化祭実行委員のあなたにすべて任せるから合唱コンの件は仕切ってちょうだい」

春奈は舞い上がって喜ぶかと思いきや、困った顔をした。文化祭実行委員だから文化祭の仕事がたくさんあるっていうんだ。そして、

「あたしなんかより音楽得意な緑山さんがいいと思い……」

いいかけたとたん。

「え。松井さん、勝手にひとを引っ張り出さないでよ。私は音楽得意なんかじゃないわよ。こういうことは言い出しっぺがやるべきだと思いまーす」

口達者な春奈に全部しゃべらせずに、絶妙なタイミングで封じ込めてしまうとは、さすがクラス委員である。

「言い出しっぺって、ちょっと～、鈴華～。クラスで『力を合わせるべき新境地アンケート』とった時、十くらいしか提案がなくてさ、みんなに投票してもらって合唱コンに決まったんじゃない、みんなで決めたんじゃない」

さー実行委員も黙っちゃいないぞ～。

「けどクラス対抗合唱コンで書いたの、春奈でしょ？」

「そうだけどさ」

「じゃ、曲目は何で、うちのクラスの場合、ピアノは誰で、指揮は誰、ってそこまで考えておいてから、提案するべきじゃあなかったの」

鈴華は落ち着いた低い声でそう言った。春奈 vs. 鈴華の口論にいたたまれなくなった女子たちはひとかたまりになってしん、としていたが、鈴華の指摘に彼女たちにざわっとさざ波がたった。

「うちのクラス、ピアノは誰がやるの？」

010.

「うちのクラス、ピアノは誰がやるの？」

宙に浮いた質問。

誰も答えられない。

まさかの事態だった。

わが二年B組にはピアノ弾けるやつがひとり、いたことはいた。とくに仲がよかったわけじゃない男子で、そいつは一学期の途中で転校してしまったんだった。

ほかのクラスからピアニストを借りてくる……という手もあるけど、だけど、クラス対抗の合唱コンだぞ……しかもその、クラス対抗合唱コンの言い出しっぺは、ほかでもない、わが二年B組なのだ。春奈にはわるいけど、事実なんだからしょうがない。

放課後集まった有志一同だったが、曲目も練習責任者も決まらず、ピアノ弾けるやつもない人では……。そっぽを向きあつた春奈と鈴華はいうまでもなく、集まった面々は気まずい思いで第一回目の練習を解散したのだった。

下校時間たつて九月の夕方だからまだ日は高い。

焼き肉が終わった後の炭火みたいな西日を顔面に浴びながら汗だくでトボトボと家への道を歩いていると。あぶられる顔面とは裏腹に、腹の裏っかわの背筋をすううっと冷たい汗が流れた。……後ろからひたひた……ひたひた……と忍び寄る人の気配がするんだ。振り返る勇気も持ち合わせない僕はそそくさと足を速める。すると、ひたひたも速度を上げた。さらに足を速めると、ひたひたもさらに速度を上げた。

もしかして……僕は尾行されてるんじゃないだろうか……

誘拐されて海の向こうへ売り飛ばされちゃうんじゃないだろうか！？

だってぼくは美形だからぜったい高く売れるはずなんだ！！

そう確信した僕はもてる気力をふりしぼり、だっ、と走り出した。売り飛ばされてたまるか！！僕にはまだやることがある。僕にはクラスの男子をまとめて二年B組を合唱コン優勝に導くという、重大な使命があるのだ！！

しかし、いかんせん、僕には重大なものが欠けていた。体力である。十メートルほど走ったところで力が尽きてしまった。背後のひたひたが十メートルダッシュで追いついてきた。今度は、はあはあと荒い息づかいまで聞こえる。

足が一步も前に出ない。息ができない。もうだめだ。

無念だ——おとうさんおかあさん。

先立つ不孝をお許してください——



演奏する曲目は？ クラス全体の練習は誰が仕切る？ 誰がピアノ伴奏を？ だいたい男子はやる気がないし！ 次々と問題が浮上するものの、でも他のクラスに遅れをとりたくない！ さあどうする！？

011.

「ミカタくーんて、呼んだのにー」

十メートルダッシュで弾んだ息の間に出てきた声は、女の子のだった。

「いきなり、走り出すんだもん」

力尽きて道路にへたり込んだ僕は女の子に助け起こされた。

女の子だったって、小さい子じゃない。僕と同じくらいの背丈。荒山中学の見慣れた、もっさりした制服。そして僕の名前を知ってるということは——同じクラスの女子？ あれ？ 五十音順名簿番号一番の、梓川さん？ 梓川夕樹絵さんだ。

同じクラスの女子とは。

一度立ち上がりかけた僕は再びへなへたとへたり込んだ。

同じクラスの女子に追いかけて追いつかれてとっつかまるなんて、さあこの後どんな仕打ちが僕を待ってるのだろう。月曜日の二年B組はこの話題で持ちきりになること、間違いなしだ。

ああ。こんなことなら人さらいにつかまった方がましだった。

あまりの情けなさ和我が身の不運に、僕はむせび泣こうとすると、「あの一、その一」、と遠慮がちな声がした。

ん？ なんなの？？

そういえば、五十音順名簿番号一番にもかかわらず、二年B組女子にもかかわらず、梓川夕樹絵さんはクラスの中であまり目立たない。じつは、二年B組女子、略して二B女といっても一枚岩ではない。勉強と洞察力に抜きこんでた緑山鈴華、口数と行動力に抜きこんでた松井春奈、このふたりが主に求心力を持ち、その他の女子たちは鈴華か春奈かいずれかの回りに……それぞれ温度の差はあれ、なんらかの形で……群れている。そしてなかには鈴華派にも春奈派にも属してない子もいるわけで、たとえば、今僕の前でもじもじしている、梓川さんだ。

「私、こっちの地区に用事があったの。でも最後に行ったのがもう三年も前だし、そのころはお母さんに車で送り迎えしてもらってたから、場所がよくわからなくて。それで、ふと気がついたらミカタくんが前を歩いてるじゃない。あ、ミカタくんはこっちに住んでるんだ、ひょっとしてミカタくん、安部先生のおうち、知ってるんじゃないかなあ、って……」

梓川さんはそれをぺらぺらと口にされたわけじゃない。つかかかったり、言い直したりしながら、小さな声で、そういう意味のことを言ってるんだ、と僕の頭でわかるのに三十分くらいかかった。

おでこの汗をぬぐいつつ、そういうこと？ と念を押すと、彼女は目をぱちぱちさせてうなずいた。「そういうこと。ありがと、ミカタくん、話聴いてくれて」

話聴いただけでありがたがられるとは。えーと。それで、梓川さんはなにをしたいんだっけ？

「安部先生のおうちへ行きたいの」

誰それ。学校にそんな先生いたっけか？

「安部先生は学校の先生じゃなくてピアノの先生」

012.

田んぼのはずれで農家の倉庫が西日をさえぎって影ができてる場所で、つい立ち止まった。ああ。涼しい。

「私、保育園のころからピアノ習ってたの。お母さんにピアノかスイミングかどっちかやるときなさいって言われて、どっちもやりたくなかったけど、さくら組の女の子はみんなどっちかやってるんだから、って。町の音楽教室へ通うことになったの。

二年くらい通って発表会にも出て。お母さんは私にきれいなワンピース作ったりして嬉しそうだった。思い出せるのはそれくらい。ほかにはなんにも覚えてない。その後、どうしてもやりたくないって泣いて、やめちゃった。

でもなんで安部先生のところへ通いだしたのか……先生は……怖くて泣きたいときもあったけど、こうおっしゃるの、『先生と、ではなくて、ピアノと、向き合いなさい。ピアノとお話しなさい』。そして最後はかならず、『ユキエさん、がんばったわね。すばらしいわ！』ってほめてくださった。私、先生のこと大好きだった。ずっと先生のところでピアノの勉強したい、できる、って思ってた……」

梓川さんは口を閉じた。ぐっと歯を食いしばってる感じで、泣き出すのをがまんしてるようだった。あ……そうだ、先生のおうちの近くに、スーパーマーケットがあったっけ……」

スーパーなら、二丁目にあるよ、カメヤっていう。

梓川さんはぱっと目を見開いた。いっしゅん、涙が飛び散るのが見えた。真黒な目だった。

013.

僕たちはスーパー・カメヤの周囲をぐるぐると三周した。梓川さんはどうしても、安部先生の家を思い出せないでいた。先生のその家の周りに何か目立つものはなかったかい、と僕は聞いた。

「スーパーマーケットがあったのは確かなんだけど……」

最初、真剣な目できょろきょろしていた彼女だったが、だんだん泣きそうな顔になってきた。

ピアノの教室なら、看板とか出てるんじゃないかい？ そうだ、このあたりに住んでる人にピアノ教室知りませんかって、聞けば、誰か知ってるかも……！

思いつきに僕が意気込むと、

「うん。安部先生の教室は看板出してなかった。それに、三年前、ピアノ教えるのをやめるっておっしゃってた……」

梓川さんはぼつりと言った。

「もう暗くなってきちゃったし、今日は諦める。ごめん、ミカタくん、こんな時間まで付き合わせちゃって。でも私、坂東先生のお話聴いて、どうしても安部先生に会いたくなって——」

そこまで言って、ぱたっと梓川さんは口をつぐんだ。僕の肩越しに、僕の背後の方向を見て。

「あ——安部先生！？」

スーパー・カメヤの小さなレジ袋を手にした、老婦人。

年取った女の人を呼ぶのに、お年寄りとかおばあさんとか、ば……まあほかにもあるけど、その人は『老婦人』と呼ぶのがいちばんしっくりくと僕は思った。

014.

土曜日の午後、梓川さんとスーパー・カメヤで待ち合わせ。梓川さんは丸い襟の白い長袖のブラウスとこげ茶のジャンパースカート姿。学校のもっさりした制服よりずっときちんとした感じ。うなじでひとまとめにした髪の毛の根元には水色の小さなリボンが結んである。なんだか——気合い、入ってるなあ。

あ。断っておくけど、ふたりで待ち合わせってたって、デ、デートとかじゃあない。単に成り行きで、梓川さんに同行することになったのだ。

昨日はもう暗くなりかけていた。梓川さんが自分の家に帰り着くころには真っ暗になってしまう。「明日の午後はどう？」と安部先生はおっしゃった。

スーパー・カメヤの東出入り口を出て、教えてもらった小さな家を訪ねる。路地に面して金属製のおしゃれな白いフェンスが張られていて、向こう側にはたくさん、緑色の植物が見えた。

「先生はお花をいっぱい育ててたっけ……」梓川さんは懐かしそうにそうつぶやいた。先生はこの家にひとりで住んでいるんだそうだ。と、玄関のドアがかちやりと開いて、先生が現れた。「いらっしゃい」、と穏やかな優しい声が言った。

「ほんとうに、よく訪ねてくれました。もう中学生になったのねえ、夕樹絵さん。ああ、お母様のシフォンケーキ、ふんわりしてて、相変わらずおいしいわ。お母様はお変わりなく？」

「はい、え……と、元気です。安部先生のこと話たら、自分もいっしょに行くって言い出して。でも私はひとりで先生にお会いしたくて」

「そうねえ、もう中学生ですものねえ」

「はい。あの。先生」

「はい」

小さな家の、南向きの小さなリビング。掃き出し窓の外には枯れかけた緑のカーテン。ところどころに青い花。アサガオって秋になっても咲くんだ、と僕はそんなことを考えながらケーキを口に入れ、かつての先生と生徒の会話を聞き流していた。

あ。こりゃ、ほんとにおいしいや。そこはかかない優しい甘さ、優しい口あたり、口のなかであっという間に溶けてしまうけど、上品な穏やかさが心に残る。そう、まるで安部先生の声のようだ。昨日、梓川さんに別れ際に「ミカタくん、明日もいっしょに行ってくれる??」と言われて二つ返事でオーケーしてしまったのは、たぶん、先生の声をもう一度聞きたかったからだ。

それにしてもおいしいな。帰ったらうちの親にもこういうのを作ってもらおう。親なんだからできるはずさ。

「ねえ、ミカタくん？」

——は？ ケーキのおかわり？

015.

あらあら、気がつかなくてごめんなさいね、と安部先生は切り分けてあったケーキを僕のお皿に乗せてくれた。ねえ、ミカタくん？ と話しかけてきた梓川さんは両手で口を押えて肩を震わせている。笑ってるんだ。あー。僕のやつ、かっこわるい。

「学校で合唱コンクールをやるのですって？」

安部先生が僕に話しかけてきた。とたんに現実に引き戻された。

そうだった。梓川さんが三年ぶりにピアノの先生を訪ねた理由。昨日、梓川さんの家の近くまで送る道すがら、僕は、なんでまた？ と尋ねてみたが、彼女はずっと、上の空だった。ずっと何事か考えている様子だった。ふつうに会話できたのは、翌日の安部先生のお宅訪問の時間と待ち合わせの時間と場所の確認、それだけだった。

ひとりで家へ帰る道々、一日の間に起こったあれこれを思い浮かべた。そして行き着いた先はその、合唱コンクールだったのだが、たった今、ピアノの安部先生から『合唱コンクール』という言葉聴いて、あっ、と——

僕は先生の質問に答えずに、梓川さんを見た。まさか——梓川さんは——合唱コンのためにピアノを弾こうというのか！？

彼女は僕の目線に気づいて目を伏せてしまった。が、真剣な顔だった。

やっぱり、そうなんだ——

質問からかなり間が空いてしまった。国語の時間に同じくらい先生を待たせると、百地先生はきまってせかせかと黒板の前を行ったり来たりしだすんだ。こういうのを間抜けというんだろう、つくづく自分がイヤになる。でも、安部先生は姿勢を変えずにじっと待っていた。僕はようやく「はい。合唱やります」と応えた。

016.

三年前、安部先生がピアノ教室をやめたのは、健康状態、からだの具合がよくなかったから、なんだそうだ。それを聴いて梓川さんの表情が曇ったのはいうまでもない。

安部先生は真っ白な髪をしてて、顔も体も小さい。見るからに上品ではあるけれど、元気いっばいのお年寄りではなかった。そして、そういう話をされるということは、もう一度ピアノを教えてほしいという梓川さんの希望が叶えられるのはむしろかしいんだろうと、僕はそんなふう感じた。

「合唱をする、あなたたちの目的は、なに？」

先生の質問に僕たちは顔を見合わせる。目的？ なんだっけ、そうだ、みんなで力を合わせて新境地へチャレンジ、それだ。

「なるほど、『みんなで力を合わせて新境地へチャレンジ』、そのために合唱をするのね」

そうおっしゃって、先生はソファに背中をあて、ゆっくりと紅茶を召し上がった。どうも先生を見ると、壊れそうなガラス細工みたいで、ふだん使ったこともない言葉で考えてしまう。

静かな午後。紅茶と、シフォンケーキのほのかな甘い香り。アサガオのカーテンから漏れる九月の日差しが床にまだら模様を作ってる。

「ミカタクン」

は、はい？

「あなた、声変わり中ではなくて？」

……そうです

「歌を、歌えますか？」

え……と、その……きついです。前はカラオケ好きだったけど、今はつまらなくて。

「どんなふうによ？」

声がおかしいし音程がおかしいし強弱がつけられないし、喉だけ自分じゃないみたいで、その一、こう歌いたい、って思うとおりに歌えないんです。

「ふつうにしゃべるだけで声がかすれていますね。あなたの年齢ではそれが普通でしょう。物理的に、喉が歌える状態にないのです。その状態で無理をすると、喉はどうなるでしょう」

でも、クラス対抗合唱コンクールが……

「クラス同士で競って、優勝する方法はあります」

え。どんな方法ですか

「歌いたい者、歌える者だけが一生懸命歌います。歌えない者、歌いたくない者もステージに整列します。そして声は出さず、口だけ動かします。大事なことは服装と演奏態度を全員しっかり揃えること。これだけで良い評価をえられるでしょう。ひよつとしたら優勝できるかもしれません」

安部先生はそう、涼しい顔でおっしゃった。僕は梓川さんのぼかんとした顔と、顔を見合わせた。

「で、でも——それって、なんかへんじゃないですか——」

梓川さんが独り言を言うように、自信なさげに言った。僕もなんかへんだと思う。服装と演奏態度が揃ってることは大事かもしれないけど、ほんとうに大事なものは……そこじゃないんじゃないかなあ。

「先ほども言いましたが、男子の声変わりは物理的に、喉が歌える状態にありません。その状態で無理をするのは馬鹿げています」

017.

馬鹿げてる。

ぜんぜん、予想してなかった言葉だった。ぶん殴られた気分だ。

けど……クラスの男子のほとんどが歌えないってのは本当で事実なんだ。それでも競い合っている成績だか、いい評価だか、とどのつまりは優勝が欲しければ、安部先生のおっしゃる通りのことをする、たしかに——それしかないじゃんか——

僕は呆然となり、その合唱コンのためにピアノを再開しようとしていた梓川さんののがっかりぶりときたら。

「風が出てきたわねえ」、と安部先生は窓を閉めに立ち上がった。先生のいなくなったソファの向こうの壁が、壁のカレンダーが、目に入った。十月の最後の日、三十一日の日付のところに……『引っ越し』と書いてある。大きな赤い文字で。

先生、あの、引っ越し？ するんですか？

「ああ、ええ、そうなの。独り身でこの家で暮らしてきたけど、からだもいまひとつすぐれないし、ひとりであるのが寂しくなってね。家を引き払って、施設に入ることにしたの。訪問介護の人と話し合っ、そうすることにしたのよ。アサガオの日よけもこれで見納め……」

「あれ？ 先生？ 家族のひとは？ だんなさまとか子どもさんとか」と、尋ねたのは梓川さんだ。女子ってへんなところに目がいくよなあ。まあ、女子だからな。

すると先生は、あら、とほほ笑んだ。「私はずっとひとりですよ。だんなさまもいなければ子どももいません」

梓川さんは、そうなんですか？ と小さくつぶやいた。

「さて。そうはいつでも、クラス対抗合唱コンクールは行事として決まっているのですよね」

僕たちはうなずくしかない。生徒会でそう決まっちゃったんだから。

「練習期間は一か月半ですって？ なかなか大変ね、三か月は欲しいところだけど、とにかく、できることをしましょう。夕樹絵さん、曲目は決まっているのかしら？」

018.

曲目が決まったらピアノをみてあげましょう、と先生は約束してくれた。先生宅のピアノを使って練習していい、って。梓川さんの喜びっぷりときたら。バンザイバンザイである。しかし、だ。肝心の曲目。それと、歌えない男子はやっぱりロパクしか道がないんだろうか。

「私、ずーっと考えてたんだけどね」

はい

「歌えない男子には楽器をやってもらって、どうかな??」

がっき!?

「そう楽器。リコーダーとか鍵盤ハーモニカとか、あと打楽器、木琴、タンバリン、太鼓、シンバル」

梓川さんは言いながら手を動かす。リコーダーの穴を指で押さえ、木琴を叩き、シンバルを両手で打ち付ける。あ。それだったら、喉使わないじゃん。

「でしょ!？」

なるほどー！ あー、でもさあ、ほかのクラスがなんか言いそうだよね、そんなのありかとかずるいとか

「うーん……でも、案外、ほかのクラスもおんなじ悩みを抱えてるかも」

そうか。二年B組男子だけが声変わりしてるわけじゃない、ってことか

「そうよ！」

これは二年B組だけの問題じゃないよね、ってことになった。二年だけじゃなく、一年も三年も声変わり中の男子は頭を抱えてるはずだ。きっとそうだ！

「男子は楽器～？ リコーダーとかタンバリン～？」

松井春奈は腕組みをして僕と梓川さんを交互に、じろり、じろりと見た。休みの日に昼寝をしたところをいきなり押しかけられて機嫌が悪いようだ。だって、目は焦点が合っていないし、髪の毛には寝癖がついてる。

焦点の合わない目でさんざん僕らをじろじろ見た挙句、「考えとく。じゃ」とおもむろに玄関を閉めようとするので、僕は決死の行動に出た。玄関ドアの隙間にとっさに片足をつっこんだのだ。門前払いを食らいそうになった刑事はこうやって玄関が閉まるのを阻止するのだ。昨夜眠い目をこすりながらTVドラマから得たワザである。

締まらなかったドアの奥で、春奈がすごいいやな顔をしているのが見えた。しかし、主人公刑事は容疑者、じゃなくて、春奈の不機嫌なんかには負けちゃあられないのだ！

ちゃんと話を聞けよ、と僕は声を張り上げた。

019.

「もおお～。ひとつちの玄関先ででかい声出さないでよ～」春奈の声はまさに不機嫌な牛だった。

「ミカタのくせに、生意気だわ～」

だいじな話なんだよ！

「大事な話なら学校でしてよ～」

「あのね、春奈さん、クラス対抗合唱コンのピアノのことなんだけど」

「……ん？」

「ピアノのことなんだけど。私が弾きます」

「……へ？」

玄関ドアがゆるんだ。ドアストッパー役の僕の足は解放された。ああ痛かった。

三年弾いてないけどひと月あれば大丈夫だと思う、と梓川さんが説明すると、むくれていた春奈の顔がみるみる締まってきた。わかりやすい顔だ。考えてることがぜんぶ顔に出るのは僕だけじゃないらしい。

「ほんと！？ ほんとに！？ うわあ朗報だわ～」と春奈は梓川さんの手を両手で握った。「昨日なんか、あれからさ、C組の文化祭実行委員の梅田にさ、『うちのクラスは楽譜を配り終えたわ。音符ごとにドレミファって読み方ふったのをね。ソプラノ、メゾソプラノ、アルトとパート別に全部ふったの。ちょっと大変だったけど。これで週明けからさっそく練習始められるわ。おたくの練習のしんちよく状況はいかが？ え？ 曲目まだ決まらないの？ でも、まだ一か月半もあるものね。焦ることないわ。お互いに金賞目指してがんばりましょうね。おほほほ』なーんて言われてさあ、カチンとくるわ、ムカつくわ、胸クソわるいわ、もおお～、ゆうべはむしゃくしゃしてたまんなくて布団かぶって寝ちゃったんだよ」

それで翌日の午後までふて寝してたのかと突っ込まずにいられなかったが、せつかく機嫌が直ったんだからやめておこうと自制した僕である。われながら成長を感じずにられない。

「ピアノはなんとかなるけど、春奈さん」

「あー問題は曲目と男子のやる気の無さだよなー」

なんでそこで僕を見るんだよ。このさい、はっきり言わせてもらうけど、変声期の男子は物理的に声が出ない。歌えないんだよ。無理に声出すと喉がつぶれることだってある。坂東先生だって、そう言ってただろ！

「……坂東の話はちょっと信じらんない。ていうか、あんな話真に受けてるとは、さすが、ミカタだよ～」

鼻で笑う春奈の憎々しくふてぶてしいことと云ったら、たとえようもない。たとえが思いつかない。昨日までの僕だったら、笑われた悔しさとたとえが思いつかない悔しさとの相乗効果というやつでもって、情けないが、ぜったい夢に見てうなされてただろう。しかし今日の僕は昨日までの僕じゃなかった。われながら驚いたことに、茶化すな！！と、春奈のやつを一喝したのである。なんとなくだが、梓川さんは坂東先生のあの話をちゃんと受け止めている、僕はそう感じていた。僕には味方がいるのだ、二対一だ！何もこわくないぞ！いやまったく多勢というのはおそろしい。

たとえ坂東先生の話が真っ赤なうそっぱちでネタで釣りでも！

「あの一……あたしは信じらんないって言っただけだけど」

とにかく！男子はやる気がないんじゃないぞ！声が出なくて歌うことが不可能なんだ！！

020.

「うん。無理。はっきり言って男子のほとんどは無理。ミカタの言う通り」

ほら、影浦くんだってこう言ってる。春奈が急ぎよ、女子クラス委員の鈴華と男子クラス委員の影浦くんとに招集をかけたのである。

「そうなんだ～、本当なんだ～ミカタでもほんとのこと言うんだ～」

なんだよそれ

「けど……」と、春奈は困った顔で頬をぼりぼりと搔いた。「クラス対抗合唱コンは、生徒会で決まっちゃったし」

「決まっちゃったことだけど、明らかに問題があるとわかれば、こうしたらどうでしょうって提案できるんじゃない？」

「……どういうこと？ 鈴華」

「さっきの夕樹絵さんの話よ。私はいい案だと思う。春奈、文化祭実行委員会に諮(はか)って、楽器を使えるようにするのよ。合唱・合奏コンにするのよ」

「でもお、そんなのダメって言われたら？」

「……春奈らしくもないわね。……よし。月曜日の朝のホームルームでみんなに意見を聴いてみようよ。とくに、男子の意見をね」

その月曜日の朝のホームルーム。珍しく緊張した面持ちの春奈がみんなに向かって、合唱コンのことで話し合いたい、と切り出すと、そこそこでひそかなため息がもれた。男子の。はなっから存在を無視されてる彼らにしてみれば、話し合いとは女子だけの話し合いであって、かったるいだけの時間だった。

「じつは」と春奈がしゃべりだした。「男子のパートリーダーのミカタくんからの提案なんですけど」、と。

教室はいっしゅん、しん、となり、次にざわめいた。

びびった！ ちょっと！ なんでいきなり僕の名前がでるんだよー。ホームルームでみんなに聴いてみようって言ったのはたしか鈴華じゃんかー。

「男子が歌いたがらない、練習に協力もしないのは、恥ずかしいからとか、やりたくないとか、そういうことだよね」

春奈はそう言ってぐるっと教室を見渡した。

「あたしはそう思っていました。でもみんなで歌えば恥ずかしくないし、練習してるうちにぜったい楽しくなるよ、優勝なんかしたらぜったいぜったい楽しいから、だからみんなで力を合わせて楽しくしようよ、いつも無気力な男子もクラスのために頑張ろうよ、きれいな声出すように努力しようよ、そう思って合唱コンを提案しました。そしたら。

歌いたくないんじゃない、恥ずかしいからでも、やりたくないからでもない。歌えないんだ。

それ聴いて、あたしは思った、なにいつてんの、そんなの頑張ってから言いなよ。

でも、ほんとに歌えないんだよ。頑張っても努力してもできないものはできないんだ。

休みの日にミカタくんがあたしのうちまでやって来て真剣にそういうのを聴いて、さいしょ疑ってたあたしはだんだん、もしかして本当かも、って気持ちになり始めました。あのミカタくんがこれだけ真剣なら本当かも。

それで、あたしはお父さんのパソコン借りて声変わりについて調べました。声変わりというのは、声帯の周りの軟骨だとか筋肉だとかが変化するんだって。だからそういう時に声出そうとしても出ないんだって。本人の頑張りも努力も関係ないんだって。

うちのお父さんは、中学生の時、音楽の授業中に歌って声がひっくり返っちゃった友だちを、つい笑っちゃったんだって。その友だち、それきり口をきいてくれなくなったって。あたしは、たったそれだけのことで口きいてくれなくなるなんて、って思ったけど、お父さんはマジメな顔して『いや。笑われたのが俺だったら、笑ったやつにどんな仕返ししてたかわからんぞ』って。

男子のみんな。ごめん。ミカタくんのいう通りだった。あたしは男子のことを真剣に聴いていませんでした」

春奈はみんなに向かって深く頭を下げた。

021.

僕から三つ左の列にいる鈴華がそうっと息を吐いたのを僕は見てしまった。鈴華も緊張してたんだ。

「それでね、男子のみんな、男子のリーダーのミカタくんから提案があります。ミカタくん、お願いします」

げっ。春奈～嘘だろなんで僕に振るんだ聞いてないそんな展開。みんなが僕を見てる。いや、でも、あの案はもともと梓川さんの。その梓川さんが目顔でうなずいてる。真黒なきらきらした目で僕を見てる。

ごくっとなみをのみ込み、そろそろと立ち上がる。いきなり振られたから、なんて言おうとか考えてなかった。だから口から出てきた言葉は僕のしぜんな気持ちだったんだと思う。

僕ら男子は、楽器の演奏で女子の歌を盛り上げたらどうかな



気だるい五時間目は国語の授業。やる気がないはずの男子たちは自分らのリーダー・ミカタの足を引っ張ろうと、せっせと陰謀を巡らす。

022.

原文……現代語訳……自分の感想

原文写すのめんどくさ。教科書を見よ …… 春はあけぼのがよい 空がちょっとずつ白くなり
山のはしっこのあたりが少し明るくなって 雲がほそくなびいている(のがよい)……あけぼのて夜
中～夜明け前？ 爆睡中じゃん。春は昼。給食のあとの国語の時間(がよい)。腹いっぱいどう
としながら、いつ当たるかいつ当たるかひやひやする(のがよい)

板書なんか自分のノートに書け ここは公共の場

あ～だめだねむいだれかへるぷみー

ももちゃん 今日化粧濃くね？

こらこら。百地先生とお呼びなさい

ちょっと正気にもどった

だれか眠気がふつとぶおもしろい話を語れ

昔々あるところに

情けないヤツがおりました

あいつだな

だれ

ミカタくん

「あるところに」訂正、「二B村に」

二B村のミカタくんはあんまり情けないので

女子からはばかにされ

男子からはさげすまれて暮らしておりました

お代官の百地荒神の守も愛想をつかしておりました

夏はよる 月のころはさらなり

やめい

023.

そんなあるひのこと

ミカタくんは災難がふりかかりました

ごうつく長者 春奈屋が祭りの歌の温度を……じゃなくて……音頭をとれと命じたのです

さあたいへんです

ミカタくんはいいかげんな性格なので

人望もなければ友情にも恵まれていませんでしたので

困ってしまいました

お代官さまに助けを求めましたが

百地荒神の守は いいチャンスだからとにかく頑張りなさいと申し渡したとか

いいチャンスってなんのチャンスすか

汚名返上のチャンスだろ

なるほどなるほど

美形が汚名返上とはこれいかに

美形正義……(笑)

024.

そこへやって来たのが、お侍の鈴華のすけです。おっと、鈴のすけでいいや

ミカタくんは鈴のすけさまにすがりつきましたが

切り捨てられました

おいここで切り捨てられちゃったら話が終わりじゃん

生かしとけ

引き延ばせ

ほのかにうち光りてゆくもおかし……

誰だよ授業きいてるのは

ほっとけよ 二B村昔話の方が大事だ

鈴のすけさまはミカタくんをしかったげきれいしました

二年B組、じゃなかった、二B村団結のために！

がんばるのじゃ！

それでミカタくんはますます追い詰められたのでした

025.

坂東が出てきたのはこっからなんだよな

なんだったんだあれ

小学校で男どもにいじめられて中学校で女先生に失恋したものがなし話

(笑)

(笑)

(笑)

で、けっきょく、なんだっての？

音楽は心の友

合唱コンに協力しろってんじゃね？

はあ？

はあ？

はあ？

いやで一す

むりで一す

できませーん

まあまあ。おまえらさあ、そんなこといわないでさ。ここはひとつミカタくんの顔をたててやるってのはどうよ

はああああ？ ミカタに協力する気？

ミカタだけじゃない。女子に協力することにもなるし坂東のことを聞くことにもなる

いい子じゃーん

まじかよ(笑)

考えてもみろよ。どいつもこいつも俺らに協力を求めてんだぞ。俺らが協力しなきゃ話にならなくてじゃん

なるほど……協力すればあっちにもこっちにも恩を着せれる……

こら木村くん、着せれるじゃなくて着せられるでしよら抜きはイケマセン

それって……俺らは最強、てことか……

さ、最強

最強

最強

それも、戦わずして最強だぜ！

選ばれし者！

す、すげえええええ

いやその戦わずしてって。俺らは歌えって要求されてんじゃねえの？

だからさー、俺らは歌えないじゃん。さいしょっから。だからステージに整列して口パクしてりゃいいんだって、そういう話

口パクですか

な～～～んだ

つまんね

この辺で話ぶった切ってすまそ。俺、おととい見ちゃった。

026.

カメヤでさあ ミカタを見た

正義～マヨネーズ買ってきてちょーだーい

正義～ケチャップ

正義～ソース

正義～バルサミコ酢

いやそれが買い物とかじゃなくて。女の子といっしょだった

なに

女の子

……幼女

ふつうに女の子。中学生だと思

なんだよ「思う」ってのは

見た感じが。地味におしゃれな子。ミカタの方はYシャツと制服の黒パンていつものカッコだった

まさかデート

カメラでデート(笑)

制服でデート(笑)

土曜日に (笑)

デートだったら許せん

やっとノート回ってキター 冬はつとめて……冬は早朝がよい……早く冬休みこないかなーお正月にはコマをあげてタコをまわしてあそぶぞー

授業きいてる木村には回すな

あのさーおまえらさーホームルームでミカタが言ったこと聞いてなかったんか？

そーいえばなんか言ってたが

その前の春奈の話が長かったから途中から聞いてなかった

おれもー。男子はどう思いますかーって聞かれたから「ミカタくんの意見に賛成でーす」って言った

おれもいちおう賛成しといた

流れ的に賛成が正しそうだった

で？ ミカタの意見てのは？

女子は歌、男子は楽器

……

……

……

めんどくせー

おれ歌がいい。ロバクですむじゃん

いや、合唱コンだけど楽器も使えるように二年B組として生徒会にかけあうって。

なんだとー

聞いてないぞそんなの

聞いてなかつただけだろ

言いだしたのは誰だよ春奈のやつか

だからミカタだって行ってんじゃん

ミカタ……

やっぱり許せん

あいつ女子に寝返ったな

てか、もともと男子のなかでも浮きまくってたし

だんだんハラ立ってきただんだん目がさめてきた

まったくさーあいつがよけいなこと言いださなきゃおれら口パクですんだんじゃん

いらねーことしてくれるよな

正しいことしたと思ってんだろ だってミカタセイギ(笑)

セイギのミカタ(笑)

こりゃーちょっとこらしめてやらなきゃな

お！ こらしめる！

出た！

助さん格さん。出番ですよ。こらしめてあげなさい

キター

がってんだ！

あほか。武士はがってんだなんて言わねえよ

誰がやる？ 助さん役。やっぱ木村くん？

パスパスパス イナダんとき助さん役やらされた

だってキャベツ畑でイモ虫飼ってたからじゃん

おーミネストローネに放りこんだらマカロニと見分けつかなかったっけな

(笑)

(笑)

(笑)

でもさーおんなじ手はつまんね。ちがうの考えようぜ

それもそうだ

いいこと思いついた。休み時間にてっぺ的にマークする。ト〇〇にもついてく。んでもってじゃまする じゃましてじゃましてじゃましまくる

男子〇〇レなら女子の目につかぬーし

xxくんたらひどーい(笑)

ひどーい(笑)

ひどーい(笑)

ひどーい(笑)

決まり！ 放課後作戦会議 いつもんところで

いつもの時間 おくれちゃいやよん

「みんなー。漢字の練習帳出してくださいーい」

国語の授業が終わって次は理科室へ移動する、休み時間。国語系の森下さやかさんが一生懸命声を張り上げている。まあ、漢字のドリルは毎日やって、練習帳を毎日提出することになって、先生がチェックして『よくできました』や、『たいへんよくできました』の桜の花型スタンプを押して返してよこす。国語系は練習帳を集めて先生の所へ持っていき、チェック済のを持ち主に返す、そういう仕事をしているのだ。

僕はいったん理科室へ向かいかけた。しかし途中で教科書がないことに気づいた。今朝はちゃんと時間割と持ち物を確かめたから教科書はカバンに入ってるんだ。「やっぱりミカタだなー」「あほー」といつも通りに男子たちからかわれつつ、二年B組の教室に取りに戻った。

後ろ扉から入ろうとして、ぼったりと、女子と鉢合わせしてしまった。相手はものすごくびっくりして「きゃあっ」と叫び、両手で抱えていたたくさんのノートを全部、ばさばさっと、床に落っことしてしまった。

ご、ごめん！ わ、わざとじゃないから！

「う、うん」

あと五分で次の授業が始まっちゃう。森下さんは慌てて床にちらばったノートを拾い始めた。机の下に入ってしまったノートを拾おうと、力任せに机やイスを動かす。僕も手伝う。理科の先生は忘れ物するやつと遅刻するやつは容赦しないって先生だからもう、大慌てだ。急げ！ 急げ！

「ミカタくん、あとあたしがやるから！ あたしは係の仕事だけど、ミカタくんが理由もなく遅刻したら……池田先生、怖いから！」

そ、そう？ ごめん！

「うん、大丈夫！」

カバンから理科の教科書を引っ張り出し、動かした机をざっと元の位置にもどしてから僕は理科室へダッシュした。

028.

帰りのホームルーム。教室の中はざわざわしていた。担任の百地先生がなかなかやってこない。週番の宮本さんがしびれを切らし、「ちょっと見てくるね」と立ち上がった時だった。がらっと戸が開いて先生がせかせかした足取りで中へ入って来た。

「ごめんなさいごめんなさい、お待たせしました。えーと、特に先生からは連絡事項はありませーん、あ、そうだわ、漢字の練習帳ね、今日チェックできてないのよー、職員室に置いてきちゃったし、今日は預かってくわ、そんなわけで今日の漢字練習はお休みで一す」

えー

ほんとー？

やたー！

「とはいっても、やりたい人は別のノートにやるって手もありますからねー無理にお休みしないでいのよー」

教室がどっと沸いた。

「はい、じゃ解散しましょう、さよーならー」

みんながガタガタとイスを鳴らしかけた時。

「そうそう、木村くーん、先生ね、ちょっとお願いしたいことがあるのよ、すぐ済むから付きあってちよーうだい」

百地先生は一番後ろの端っこの席の木村くんを気さくに手招きし、さっさと廊下へ出て行った。

029.

「あのお、何手伝うんですかー俺用事あるんですけどー」

「手間はとらせません」

木村亮太は担任の後について会議室へ入って行った。ここは職員室の隣にある職員用会議室。生徒にはあまり用のない場所である。その縦長の部屋に置かれた会議用テーブルに沿って一番奥まで歩いて行った担任は、片方の手で、「そこへ座って」とパイプイスを指差した。

亮太は、言われるままイスを引いて腰かけた。隣の職員室で電話が鳴る音。応対に出る職員の声。物音といったらそれくらいしかない。ひどく静かだった。

「木村くんは——」

「——はい？」

「『枕草子』に興味、ある？」

「え——まあ——興味があるってほどじゃ」

「そお？ でも、今日は熱心に先生の授業きいてたじゃないの」

いつの間に取り出したのか。百地担任がぺらりとめくったノート。亮太の時間が止まった。呼吸も。脈拍も。心臓の鼓動も。

オレンジ色の表紙の漢字練習帳はクラス全員、同じものを使っている。しかしそのノートには記名がない。提出用と区別するために記名していないのだ。仲間内で回して書き込み、読み合い、コミュニケーションを図っている、ひどく汚れているが大事なノートだ。亮太は慌ただしく記憶をたどった。

国語の授業が終わった後、ノートを机の中にしまった。次の授業の池田先生が時間と持ち物にうるさいからだ。忘れ物があってはならないし、授業に関係のないものを持っているのも、だめなの

である。無事に授業をクリアし、教室の自分の席に戻ってみると……なんだか違和感があった。プラスチック製の引き出しの向きが逆だった。

森下さやかがばらまいた漢字練習帳を拾うために慌てて動かした机が傾いて引き出しが飛び出してしまったとは、さやかがすべての漢字練習帳を回収していったとは、亮太が知る由もない。きっと佐々木くんか高木くんが引き出しを開けて持っていったんだろうと思った。授業が終わったらすぐにつかまえて返してもらおう。『練習帳』には仲間の名前を書いてはいけないというルールがあったが、今日は何度か自分の名前を見かけたような気がしたのだ。取り返して、消さなくちゃ

「ほら、今日の日付もちゃんと書いてある。あなたは飛びぬけて字が上手ねえ」

030.

「遊びです！ ふざけてたんです！」亮太は懸命に言い張った。「ぜんぶ冗談です！」

「すると——ミカタくんをこらしめる、というのは？」

「冗談です！」

「トイレでじゃましまくるというのも？」

「もちろん冗談です！ みんなで冗談いってふざけてたんです！」

「ああ、冗談だったのね、さっきからそう言ってるものね。じゃあ、ミネストローネにイモ虫を十匹入れたのも、冗談で？」

「十匹も入れてません三匹か四匹だった——」

「あれまあ。三匹も四匹も。かわいそうにねえ」

「湯気が立ってるところに生きたまま入れたから、ぎゅっと縮こまって、ちょっとかわいそうだとは思ってたけど——」

「ふむふむ。それ食べた人は生きたままのイモ虫が入ってるって、知ってたのかな？」

「……………」

「冗談にしてはちょっときつくない？　なんでそんなことしたのかな」

「おたまじゃくしの水槽が生臭くて気持ち悪かったから……………」

「おたまじゃくし？　そういえば、あのおたまじゃくしは誰が持ってきたんだっけ？」

「稲田。臭いから持って帰れって言ったら、カエルになるまで観察するか次はモンシロチョウを飼ってみるとか小学生みたいなこと言い返してきて……………それで……………」

「それで？」

「モンシロチョウの幼虫を食わせてやれ——って——」

「食わせるって、誰に？」

「——稲田——」

「稲田くんが食べる所を、木村くんは、見てたの？」

「——見てた——」

「どんな様子だった？」

「……………」

「木村くん？ ……どうして泣くの？」

「どうしてって——」

031.

腫れあがった目を伏せ、背中を丸めた木村亮太が昇降口を出て行くのをこっそり見届け、坂東先生は会議室へ走った。あわただしく扉をノックし、返事もまたずにながらりと開けた。

「百地先生！」

「ば、坂東先生～、怖かったです～」

「し、しっかりしてください！」

「彼、体が大きいじゃないですか、逆切れされたらと思うと怖くて怖くて——」

「だから、万が一なにかあったら学年主任の俺が踏みこみますからって約束したじゃないですか！」

「とにかく彼の口から本当のことが出てくるまでは我慢して我慢して！ こうでこうでこうだったんじゃないの？ って、つい口から出そうになるのを、一生懸命我慢して！」

「よく我慢しましたね。本当のことが聴けたんですね」

「はい。私も担任で国語教師ですから、文字を見れば誰が書いたものか、この『練習帳』に参加していたのが誰々か、だいたいわかります。もう今日は生きた心地がしませんでした。彼らひとりひとりはおとなしくていい子なんですよ……」

「集団というのは善くも悪くも個人にパワーを与えますからね。ところで、ミカタは？」

「ミカタくんは稲田くんの家へ行くと言ってました。文化祭に誘ってみる、と……」

「五月からずっと休んでる稲田くんですか」

「はあ。登校できない理由がどうしてもわからなかったんです。でも——」

練習帳の表紙の隅に木村亮太のではない筆跡で書かれた、『No.7』という番号と文字を、二名の教師は苦々しく思い出していた。

032.

稲田くんのお母さんは言った。「新一は誰にも会いたがらないの」

そうですかー

「ねえミカタくん、何か心当たりはない？」

稲田くんが学校休むようになった心当たり。ぜんぜん、ない。ぜんぜんわからない。

「理由や原因がわかればと思うんだけど……さっぱりわからないの。新一になにかあったのか」

お母さんは途方に暮れていた。悲しそうで、僕も泣きたくなった。でも、言わなくちゃ。手紙を書こうかと思ったけど、僕は字はへただし、丸めて捨てられたらそれまでだし。

一か月後に、文化祭があるんです、というと、お母さんはますます悲しそうな顔をした。そうか、楽しくもなんともないものなのか。

文化祭で、クラスごとに音楽やるんです。男子は楽器をやることになりそうなんです。稲田くんは音楽は得意ですか、なにか楽器できますか？ 僕は音楽なんてさっぱりなのに男子のリーダーやることになってしまいました、力を借りたいんです。助けてほしいんです。つらくて学校に来られないなら……僕が稲田くんのところへ来ます。僕を……助けてください。



ユキエのかつてのピアノの教師・安部先生は、合唱にも造詣が深かった。ミカタは安部先生との会話から合唱コンを音楽コンに変更するよう、クラスと生徒会を動かし、ついに練習にこぎつける。

033.

二年B組の提案に文化祭実行委員長・大原雅人は、面倒な事言いだしやがってと口ではぶつぶつ言いつつ、心の中はまったく違った。じつはこのたびの合唱コンの件で、彼はクラスの男子から総スカンを食っていた。理由はほかでもない、彼らは歌えない(時期だ)からだ。

そして総スカンを食っていたのは大原くんだけではなかった。生徒会長・小泉洋志もまた然りだったのである。口では面倒な事言いだしやがってと言いつつ、すっと立ちあがった小泉生徒会長はその日のうちに役員会を招集、翌日には臨時生徒総会が開かれた。松井春奈が得意の熱弁をふるい、全校生徒に理解を求め、文化祭のプログラムは晴れて『クラス対抗・音楽コンクール』に変更された。『力を合わせるべき新境地』が募集されたとき、いくつかのクラスで『クラス対抗・音楽コン』がいったんは候補にあがっていた。まあ、文化祭といったら音楽、と、わりとすぐに思い浮かぶもんね。けど、ここへきて合唱コンが音楽コンに変わったところでどこからも文句は出なかった。

「むしろ、歓迎されたよ」「二年B組よくぞ言ってくれた」とは、大原委員長の弁である。

後になってそう聞いた僕は、なんでかな、と不思議に思ったものだ。二年B組の意気地のない男子は当時、さいしょっから意見をいう気はなかったけど、全校中の男子が合唱コンに反対してもよさそうなもんなのに、僕らが言いだすまでそういう声なかったのは、なんでかな？

安部先生は音楽や練習についてはそりゃあ厳しいことおっしゃるけど、ふだんはとても優しいんで、僕はたいていのことはなんのためらいもなくつぶやける。どんなあほなこと言っても先生は(春奈みたいに鼻で)笑ったりしないし、どんな質問をしたって「そんなことも知らないの？」なんて、ぜったいに言わない。

「合唱はみんなの力を合わせるものだからよ」と、安部先生はおっしゃった。「そして、合唱コンクールというからには力を合わせてよそと競うわけでしょう？ より団結が求められるわけね。そこで異を唱えるとどうなるでしょう」

……周りから浮くと思う

「そうでしょうねえ。みんな薄々それに気づくから、反対意見を言いだせないのね。それとね、ミカタくん、おばあさんのいうことだと思って聴いてちょうだい。今回はコンクール形式だけど、次回はお祭りがいいと思うわ」

034.

楽譜と模範演奏を録音したCDとプレイヤーとを持って、再び安部先生の家を訪ねる。先生はソファにゆったりと腰かけ、楽譜に目を通し、そのうち目を閉じて音に耳を傾けていた。やがて先生が目を開いてほっと息をつき、「素敵な曲じゃないの！」とほほ笑んだときは、僕と梓川さんとは顔を見合わせて、やった！ と叫んだ。

先生はほほ笑みながら続ける。「楽譜に『小学生向け』とあるわ。けっしてむずかしい曲ではないということですね。メロディラインは親しみやすく、聴きやすい。これなら演奏する側も聴く側も楽しいでしょう」

僕たちは、はい！ とうなずいた。なんだかどンドンやる気がわいてくる。

「ただ。そういう曲であるだけに、音を合わせることが大切ですよ」

それから先生は僕らに二年B組の女子の人数と男子の人数を質問し、楽器の種類とどの楽器を何人でやるという案を作ってくれた。

「必ずしも希望する楽器ができるとは限りませんから、その辺の調整で苦勞するかもしれません」先生は僕をみてそうおっしゃった。そうだよな、男子を調整するのは男子の僕の役目だ。……頑張ろう。頑張ろう。

梓川さんを家の近くまで送り届け、たそがれ時の農道を歩く。日は沈んで、空気はひんやりしてる。『枕草子』では秋はなにがいいっていったっけ、なんだっけ。僕はこの匂いが好きだな。実った稲の匂い。ついこの間まできれいな緑色だった稲がみるみる、みるみるうちに、なんていうか、『実りの色』に変わっていく。そして匂いに気がつく。夏にはなかった。懐かしいような、哀しいような、秋の匂い。

国語の時間にどの季節が好きかと聞かれて、春に手を上げたのが一番多かったっけ。次が夏、それから冬、一番少なかったのが秋だった。でも好きなものは好きなんだから、しょうがない。くんくん。くんくん。あー。いい匂い。いや、好きな匂い。懐かしくて哀しい匂い。……に浸っていたその時、「ミカタくん？」と声をかけられた。

日は落ちて、昏くなりかけている時で、そこに立ってるヤツの顔がよく見えない。誰？

「ミカタくんでしょ？」ともう一度。あ、この声は——稲田くんじゃないか

「ミカタくんちまで行ってきたんだ。そしたら、お母さんが、正義まだ帰ってないのよ、って」

035.

稲田くんは言った。「この間、うちまで来てくれたんだってね」

うん

「ボク、文化祭なんかぜったい出ない。学校なんかぜったい行かない」

……

「この間までそう決めてた」

……この間まで？

「あのさ、二年B組で、なんかあったの？」

二年B組で？ いや一僕はほら、文化祭のクラスの音楽でさ、男子をさ、まとめることになっちゃってね

「——そうなんだ」

うん

「ミカタくんがそう言うならそうだよな」

うん。そうだけど？

「……そう、か。そうか。あのさ、文化祭で、ボクにもできること、ある？」

036.

稲田くんは何か楽器できる？ という僕の問いかけに、彼は、ああ、という顔をし、それから目をぱっと輝かせた。

「そうだそうだ、そのことでうちまで来てくれたんだよね。楽器……やってみたいのはある。ドラムス」

ド、ドラムスだって？ それって大太鼓に小太鼓がいくつもくっついてて、両手両足で蹴ったり叩いたりするアレ、のことだよな。いやー。さすがの荒山中学にそれはないし、個人で……持ってい

るとしても……持ち込むのはどんなもんかなあ。僕がそうつぶやくと、稲田くんはがっくりきてしまった。

「ドラムスがかっこいいじゃん。こう、ぱしぱしぱし、どどんどどん、じゃーん！ て。えーだめなのー？
じゃーギターがいいな、ちょっと弾けるんだよ、GとCとDとD7押さえられる」

な……なにそれ

「なんだよー、GやCやDやD7、知らないのー？ そんなの常識じゃん」

じ、常識なの？ ごめんぜんぜんわかんない。それにギターはちょっと……

「えー。文化祭で音楽やるっていうからやりについてもいいかなーって思ったのにー。ドラムスもギターもだめって。なんだよー、まさかボーカルもだめなのー？」

はあ。ごめんね

「やっぱ、やめよっかなー」

そ、そんなこといわないでよ、稲田くん！ みんなで協力したらきっと楽しいよ！ ね？ えーとね、使う楽器はね、鍵盤ハーモニカでしょ、リコーダーでしょ、それと大太鼓、小太鼓、シンバル、鉄琴に木琴、トライアングル

「だ、だせー、超だせー！ それじゃあ、小学生の合奏じゃん」

う、うん、楽譜に小学生向かって書いてあった

「——まじ〜？」

稲田くんの心底呆れた目つきとため息混じりのしゃべり方に、僕はおどおどと、ごめん、と謝った。よーく考えれば呆れられる筋合いも謝らなければならない筋合いも、これっぽちもないんだ

が、永年虐げられてきた経験は僕の血となり肉となっているかのようだ。つまり、ごくしぜんに表れてしまうのである。

「それで——鍵盤ハーモニカやリコーダーなんかで、何をやる気？」

037.

文化祭のために僕らが選んだ曲は、『白い森のカーニバル』、という。

どういう曲かってのは、またそのうちに紹介する。歌を担当する女子たちはみんなで歌うことに集中して団結はいや増したのだけれど、楽器を担当することになった男子はとにかく問題だらけだった。

なにしろ、誰がどの楽器をやるか、というところからつまづいた。どういうわけか小太鼓三人のところに九人の希望者が集中したのである。すごい競争率だ。いくらなんでも多いんで、黒板にでかいあみだくじを描いて、公明正大にくじ引きしてもらって、稲田、木村、富永(五十音順・敬称略)に決まった。

稲田くんの第一希望がかなったので僕はひとまずほっとした。

残念ながらはずれた六人のうち、三人は楽譜読むのが苦手、あと三人は楽器そのものが苦手だというから、とにかく、楽譜苦手な三人には大太鼓、シンバル、トライアングルといった打楽器のどれかをやらしてもらうことにして、残り三人について頭を抱えていると。

「相変わらず、しょうがないわね男子って。あーだこーだあーだこーだ」

この声は——クラス委員の緑山さん——？

「あのね、女子の中に、楽器やりたいって子がいるのよ。楽器やりたくない、って男子と交換できないかしらね」

な、なんだって——

そんなわけで。木琴にひとり。鍵盤ハーモニカにひとり。リコーダーにひとり。女子が加わった。こういう楽器をやるからにはちゃんと楽譜を読めるということで、各パートにこういう人がいるのはとてもなく助かる。僕は緑山さんの両手を握りしめてお礼を言いかけたが、緑山さんは僕の手を振り払い、そっぽを向いた。

「お礼もなにも。クラス内で融通しあったり助けあったりなんて、当たり前のことよ」

な——なんて男らしいんだ。僕もこうありたい。

038.

さてようやく練習開始にこぎつけた。まず、全員で集まって模範演奏の録音を聴く。何度も聴く。この曲をこんな風に自分たちで演奏するんだとイメージしてもらわせた。

歌組は女子に任せ、僕は女子三人を含めた楽器組の前に立ち、メトロノームを左手に、一席ぶった。

リズムを正しく取ろう。みんなで同じリズムを取るんだ。楽譜をよく見て。自分のパートの自分の音に責任を持ってほしい。自分のパートを極めるのがきみたちの使命なのだ！

すると、誰だかわからないが、「おう！」と応えてくれた。あちこちからバラバラと、「おう」「おう」と控えめな声が続いた。僕は嬉しくなって、右手で拳をにぎった。よーし！ みんないっしょに！ さん、はい！ 「おお！！」揃った。やればできる。

「任せましたからね」と言っておきながら、百地先生がちよくちよく練習をのぞきにくる。「調子はどう？」

ええまあなんとか

先生は打楽器が気になるみたいだ。大小の太鼓、シンバル、トライアングル。

「その……みんな仲良くやってるかしらね」

はあ。仲良くかどうかはわかりませんが。みんな練習の時は夢中ですよ

「そう……」

練習の時は夢中ですよ、と言ってみたものの。先生が打楽器を気にする気持ちがわかる。肝心のリズムを刻んで、ポイントで締めなきゃならないのに、なんだかバラバラしてるんだ。この二週間で、メロディ担当の楽器の方はかなり揃ってきたのに、打楽器はバラバラしてる、とわかってきた。

なんでだろう。

039.

放課後の練習が解散になり、使った楽器を音楽準備室の所定の場所に片付けるのだが……あれ、富永くんが小太鼓を二台まとめて片付けてる。富永くん、ひとつ僕が手伝うよ。

みんなもう帰ってしまって、準備室には僕と富永くんのふたりだけだった。

「もーまいるよー」と、富永くんはぼやいた。「練習のあと百地先生が稲田を連れてっっちゃったんだ、久しぶりだからお話ししましょうとかいって」

あー、富永くんが片つけてたのは稲田くんの小太鼓？

「そうだよ。まあ稲田はずっと学校来れなくて、文化祭の音楽練習だけ出て来れるようになって、おんなじパートのぼくが面倒みるくらいは、べつにいいけどさ」

富永くんていい人だったんだね

「どーいう意味だよ」

僕はちょっと嬉しくなって、笑った。富永くんは、ふん、と鼻息をつき、「あのさあ、ミカタさあ」

なに？

「おまえさあ、稲田が学校来れなくなった理由って、知ってる？」

……知らない

「やっぱり知らないかー。ぼくさあ、それとなく、いろんなやつに聞いてみたんだ。ほら、いちおうおんなじパートだから知っておいた方がいいかなと思って。けど、知ってるってやつが、ひとりもない。影浦なんか、クラス委員のこっちが知りたいくらいだなんていってたし」

ふーん……

富永くんは富永くんなりに気を使ってる。打楽器がバラバラなのは、それぞれが別々の方向を向いてる、そういうことじゃなかろうか。

040.

稲田くんのこと、いっそ百地先生に尋ねてみようか——そんなことを考えて昇降口へ歩いていると、廊下の角でばったりと春奈に出くわした。

「あ。ミカタ。ちょうどよかった。いっしょに帰ろう」

え！ となったのは僕だけではない。富永くんもである。彼は片方の目に好奇の色を、もう片方の目に気の毒げな色を浮かべ、振り返り振り返り、ひとりで帰って行った。

あ、あの。なにかご用ですか！？

「なに緊張してんのは気持ち悪いわね、っていつものことか。さっそくだけど、楽器組の調子はどう？」

まあ、なんとか

「あんまり、よくない、んじゃない？」

* * * * *

「歌の方に来てる、男子三人。荒木くと並木くと鈴木くんだけどねえ。なーんか、こそこそしてるのよね。楽譜読んでるときに彼らだけでノート回しあったりして」

はあ……もともと、仲良かったんじゃないか？

「う——ん。それでさ、ほら、小太鼓決めるときに、九人も立候補者がいたじゃない？ あたし、それ見てて、あれ？ って」

僕は背中のカバンから一冊のノートを取り出した。文化祭音楽練習用に作ったんだ。主に安部先生からのアドバイス、あと聞きたいこととか思ったこととか、それと楽器編成の時のメモとか、いろんなことを書き込んである。それによると、小太鼓の希望者……九人……名前……ん？

「稲田くんはずっと休んでたけど、富永くんは前から三列目の席、ほかの七人は一番後ろの列とその前の列と、二列に集中してると思わない？」

そういえば——僕は記憶を頼りに七人の席を○印で描いてみた。一番後ろの列に水木・佐々木・木村と並んでいて、その前の列へ行って水木の前の席に並木、その左隣が高木、木村の前の席が荒木、その右隣が鈴木だ。佐々木の前、並木と荒木の間は女子だ。縦に五列にわたってるけど、ほんとだ、よくよく見ると七人がほとんど固まってるじゃん。

「ね。稲田くんと富永くん以外はみんなお友だちなんだよ。それが楽器編成のおかげでバラバラになっちゃったというわけよ」

041.

音楽でひとつになるはずが、楽器編成のせいでバラバラに。笑えない。

「あんたが頭抱えることないじゃん、ミカタ。楽器の編成は公平にやったんだし、あんたのせいじゃないよ」

いや——そうはいつでも——たしかに打楽器がバラバラなんだよ。

「——困ったね」

ちょっと違う話なんだけど、松井さんさ、稲田くんがずっと学校へ来なかった理由、知ってる？

「ああ。稲田くんね。たぶん——あれじゃないかな」

え。なに。

「二年になって、稲田くんおたまじゃくし飼ってたんだわ、窓際に小さい水槽置いて。ある日、体育の授業から帰ってきたら水槽が無くなって、稲田くん、真剣になって探してた」

そんなことあったんだ！ で、水槽見つかったの！？

「……うん」

どこで！？

「それが……家庭科の調理室。流しの中」

……おたまじゃくしは？

「水槽空っぽだったっていうから。たぶん……」

……うそ……

「ほんとだよ。稲田くん、机で突っ伏して泣いてたよ」

——知らなかった——

「そう？ 女子は誰かどうか知ってる話だよ。男子ってあれだよなー、何事にも無関心だもんねー」

それにしても、誰がそんなことしたんだろ

「それが。わかんないんだよね」

僕らは並んで道路を歩いていたんだが、松井春奈はふっと黙ってしまった。それからいきなり左手で僕の右腕をつかみ、ぐいーっと強く引っ張った。

な、なにをするのよ、やめて——

言いかけた僕の口を春奈の右手がふさいだ。——ぐふっ

042.

学校の隣は荒山神社。神社だから杉だかなんだか背の高い樹がいっぱい立ってて境内は薄暗いし、あちこちにお社や石塔があって見通しがきかない。かくれんぼ、デート、密会にもってこいの場所である。春奈が僕の口を封じ、あごで指したのは、その神社に通じる横道の奥だった。歩いて行く人影がある。数えてみると……ふたり……ふたり……三人。そのうちのひとりがふっと日向に出てきて、横顔が見えた。そして、もうひとり。

(見た！？) 春奈が強くささやいた。僕はこくこくとうなずいた。見た。

(荒木くん、木村くん、高木くんもいたわ！ ほーら、あたしのにらんだ通り、あの七人は仲良しだったのよ！)

いやー、すごい！ 大発見だね！ けど。仲がいいんなら、合奏も仲良く息を合わせてくれな
いかなあ

(それはそうよね)

春奈はようやく手をゆるめ僕を開放した。口の周りとう腕にはぜったい青あざができてるにちがいないぞ。

いきなり。

僕は背中を叩かれた。同時に春奈も飛び上がっていた。

「ぎゃ……」

互いの口から出かかった悲鳴をとっさに互いの手でふさぐ。とっさのことだからなんでそんなことをしたのかよくわからないが、七人の秘密を盗み見てしまったような気がしてたからだろう。

「仲いいねー」と背後からのんきな声が聞こえた。稲田くんがのんきな顔つきで僕らを見比べていた。

僕らは互いの口からあたふたと手を離し、あたふたと振り回した。

こここここここれには深いワケが！

「ないわよそんなもん！ もおお、いきなりなにすんのよ、おどかさないでよ！」

稲田くんはあははと笑った。



春から学校に来なくなった男子生徒がいた。彼、稲田くんが不登校になった原因を男子は誰も知らないという。ミカタは稲田くん本人から話を聴くに及び、ショックのあまり寝込んでしまう。

043.

トンボを追いかけてたらきみらを見かけたんだよ、と稲田くんは言った。あ。トンボですか。

彼は音楽の時間と放課後と、文化祭の音楽練習のときしか学校に来てない。だから手ぶらで身軽なのだ。そういえば、今日の練習が終わるころ、百地先生が連れてっちゃったっけ、それでこんな時間まで学校にいたんだ。

「ふーん。百地先生となに話してたの？」

僕だったらぜったい遠慮して聞けないようなことも春奈はおかまいなしだ。なに話してたかなんて、それは稲田くんと百地先生だけの秘密……

「こないだ木村くんたちがボクんちへ謝りに来たって話」

「——はい！？」

春奈が素っ頓狂な声をあげた。返事を期待してなかったらしい。

「き、木村くんたちが？ な、なにを謝りに行ったの！？」

「一学期にナオトを勝手に捨てたこと」

「ち、ちょっと待って」

春奈はぎゅっと目をつむっておでこに片手の平をあてた。気がつくとも僕も同じポーズをしていた。

「木村くんたちが？ 何を捨てたんですって？」

「ナオト。おたまじゃくしのナオトを勝手に捨てた」

おたまじゃくしの名前が『ナオト』というんだ。

稲田くんは下を向いた。

「弟の名前なんだ。いっぱいいっしょに遊ぼうって約束したのに、三歳の時に死んじゃった」

春奈は、うっ、と言葉に詰まった。

「勝手に捨てちゃってごめん、なんて、今さら謝ったって、ナオトは帰ってこないよ。ごめんで済むならおまわりさんいらないじゃん。謝らなくていいからナオトを返してよ！」

「……………」

「——って言って追い返した」

「そうだったんだ……」、春奈はそう言っただけだった。僕もなんて言っていいかわからなくて、黙っていた。

稲田くんによると、謝りに来たのは木村くんのほかに六人いた、という。つまり、全部で七人。

044.

ショックのあまり、その晩僕にご飯を食べられず、早々にふとんにもぐりこんだ。一匹のおたまじゃくしを、何人もで寄ってたかって、捨てるなんて。それも田んぼにとかじゃない。家庭科室の流しから、下水に流したんだ。

手も足もない無力なおたまじゃくしに、なんでそんな仕打ちができるんだろう。なんで。

でも、ショックの種はそれだけじゃなかった。その事件のあった日の、給食の時間に――

稲田くんは熱に浮かされたように、その時の模様を微に入り細をうがち、そりやもう事細かに描写してくれたんだが、途中から春奈は口を押え、僕は耳をふさいだ。木村くんたちはその件についても謝罪していったという。

謝られたからといって、どうなるもんじゃない。稲田くんのいう通りだ。

彼は、五つ違いの弟が病気で死んでから、小さな生き物に興味を持つようになったんだそうだ。弟をかわいがるように、生き物をかわいがった。おたまじゃくしも、蝶の幼虫も、トンボのヤゴも、みんな、ナオトくんだった。

もし僕が同じ目にあつたとしたら――やっぱり、少なくとも、学校なんか行かないだろう。情けないけど、僕の頭はそれくらいしか、思いつかない。

その晩、僕は高熱を出し、翌日から学校を休んだ。

045.

熱は三日で下がったが、どうしても起き上がれない。起きる気力がわいてこない。さらに二日ぐずぐずとふとんをかぶっている。食欲もなくて、プリンくらいしか食べられない。一度ご飯を食べてみようとしたが、ご飯を目にしたとたん——想像力に火が点き。罪のないご飯にごめんと謝る。

それにしても。なんだってこんなにナイーブな人間になってしまったんだ。いい加減でずぼらでむとんちゃくだったころに戻りたい。狙いをさだめて蚊をぶつつぶし、ゴキブリを全力でスリッパで引っぱたくことができた、あのころに戻りたい。

ろくに食べていないにも関わらず、トイレには行きたくなる。なにしろ水分だけは取りなさいと、母親がちょいちょいスポーツドリンクを差し入れてくれるからだ。そんなわけで二階の自室から一階へ階段を下りて行くと、なにやら話し声が聞こえてきた。玄関の方からだ。母親が誰かとしゃべってる……？

誰だろ、と足を動かしたとたんにスリッパの裏がするつとすべった。段を踏み外した！ と思った時には、ずだだだだんと、お客がいる玄関前のスペースまで滑り落ちていた。

母親の開口一番。「あんたって子は！」

大丈夫とかケガはないとか言ってくれてもよさそうなもんだが、やっぱり、僕だ。ダサすぎるくらいがちょうどいい。階段の角にぶつけたお尻の痛みがいとおいしい。

「あれ。意外と元気そう」

「ほんと」

お客は春奈と梓川さんだった。ごめん、その前にちょっと……行ってきます。

ふたりは一昨日も来てくれたんだそうだ。梓川さんとうちの母親が台所へお茶をいれに行っているすきに、僕は春奈に小声で尋ねた。梓川さんに稲田くんの例の話、したのか？ と。

「してないしてない」と、春奈は頭をぶんぶんと横に振った。「ほかの人に言えるわけないじゃん、あんな、ショッキングな話。いくらあたしだって、そんなことできないよ！」

そーかー、春奈でもショックだったのかー

「あたしでも？ ってことはミカタ、あんたの熱って……えーそーだったんだー、じつは、あたしもあの日の晩、熱出して翌日、学校休んじゃって」

ほんとかー

「まあ、あたしはいちんちで復活したけど。あんた重症だったんだー」

僕は揃ってため息をついた。お茶が来たので、この話はストップ。お茶菓子はなんと梓川さんの(お母さんの)シフォンケーキだ。この……甘い香り。優しい味わい。プリンと飲み物以外受けつけなかった胃がとたんに動き出した。ああ生きててよかった。僕がそう言うと、梓川さんは「よかった」と控えめにほほ笑んだ。

046.

学校の様子はべつにどうでもいいけど、音楽練習のことだけは気になる。稲田さんと木村グループとのトラブルを知ってしまったからだ。木村グループはかつての仕打ちを謝罪したんだが、稲田くんは受け入れられないという。まあ、僕が稲田くんの立場だったらやっぱり追い返すだろう。決めゼリフは、『おととい来やがれ』、だ。

稲田さんと木村くんとは同じ小太鼓チームだ。先にも述べたが、希望者を公明正大にあみだくじで絞った結果であり、稲田-木村間の気まずさといったら想像に余りある。ところが。どっちも小太鼓でこの三週間、がんばっているんだな、これが。

同じチームにいるのがイヤなら、やっぱりやめる、という手もあるだろうに、と僕はふとんをかぶったまま考えたものだ。そして彼らは相変わらずあみだくじで得たパートで頑張っているという。

「稲田くん、一昨日、理科の授業に出てきたんだよ」

リビングの周りをうろうろしていた母親が買い物に行ってくるというのでかけてしまうと、春奈が切り出した。

『音楽練習だけ参加』から一歩進んだってこと？

「うん。理科が六時間目で、次が音楽練習だったから、練習のついでに授業に出た、みたいな感じ。それでミカタが休んでるってわかったらがっかりしてた。『まだ休んでるの？』、だって」

……稲田くんには言われたくないな

「まあね。で、昨日の六時間目が体育でさ」

音楽の練習のついでに体育の授業に出てた？

「そうなんだよー。でも体育の授業じゃなかった」

どうということ？

「坂東の独演会よ」

女子体育の坂西先生がまたまた不在だったので、女子の体育はまたまた男子とっしょに坂東先生がみることになったわけよ、と春奈の独演が始まった。

今日は校庭が空いてるから、女子対男子でサッカーがいい、と息巻く女子たちを、坂東先生が「まあまあ」と手でなだめたんだそうだ。

「まあまあ。落ち着け。サッカーか。時間があまったらそれもよし。いやじつはな、先日本よりをいただいてな」

いっしゅん、みんなぼかんとしたのはいうまでもないわ。おたよりよ、おたより。メールとかじゃないのよ。そしたら坂東、ほんとに手紙らしきものを取り出したの。

「えー、『坂東先生こんにちは。先生にお願いがあります。このあいだの男子女子合同体育の時間に、先生の子どものころの話を聞きました。とくに小学生の時の話がわすれられません。あの話はあれでおしまいなのでしょうか。続きがあったらぜひ聞かせてくれませんか。お願いします。匿名希望より』、というわけで。ごほん。じつは、続きがある」

楽にして聞いてくれ、というんで、あたしたちは暖かい芝生の上に思い思いに座ったのよ。

* * * * *

「……小学校五年の初夏のある日、校庭の隅でクラスメイトの手で丸裸にされた、というところまで話したんだ。その後のことは何も覚えていない、と。

しかし、俺の家は学校からかなり離れていた。初夏とはいえ、真昼間、丸裸の子どもがその辺を歩いているのはいかにも異様だ。その姿は近隣住民の目にとまり、交番に通報されたのだな、俺はお巡りさんに保護され、事情を聴かれ、パトカーで家まで送り届けられた。学校でも、学校関係者の間でも、大騒ぎになったらしい。俺の名前も、どの学年の、どのクラスの、どのメンバーの仕業か、瞬く間に広まってしまった。

それからしばらく、クラスの男子たちが親同伴で入れ替わり立ち替わり、俺の家へ謝罪にやって来た。とても人前に出られなかった俺の代わりに、親が全部対応した。あまりの事態に、元々から

だが丈夫でなかった父親が、遂に心労で倒れた。引っ越しを余儀なくされたのは、母親の実家に身を寄せたからだ。

まあ……『匿名希望』さんが聞きたいのは、俺の家庭事情などではなく、俺の気持ちだろう。クラスメイトに集団でいじめられ、おおやけに知られ、謝罪を受けた俺の気持ち、ではないかと思う。

謝りにきた者たちは玄関先で一様に、『悪気はなかった』と言った。『ふざけていて』、『遊びのつもりで』、『〇〇くんを誘われてしかたなく』、『つい調子に乗って』、『幸太郎くんがいっしょに遊ぼうとしなかったの』、というのもあった。そしてとうとう、俊くんはやって来なかった。確かに彼だけは何もしていないからな。

俺は……何も、受け入れることができなかつたし、何も信じるができなかつた。あれから四十年たった今でも、それは変わらん。できないものはできない。

だが、いくつか学んだことはある。そのひとの大事なモノを理不尽なやり方で取り上げる。そのひとの人間関係を壊す。そのひとのプライドを踏みにじる。そうすればそのひとは確実に傷つく。そしてその傷は、治らない。魂についた傷は治らないのだ。あくまで、俺の経験からな。

偉そうなことを言ったところで、この俺だって、知らずに誰を傷つけているかわからん。もしそうなら……その相手に、許してくれと、心から謝りたい。おまえたちは、坂東はなんと虫のいいやつだ。そう思うだろう。しかしそれが、俺の偽りのない気持ちなのだ」

* * * * *



傷つけた者と傷つけられた者。謝罪と拒否。それぞれの気持ちの平行線を、音符がつなぐ。坂東先生の少年の日の初恋も、また。

048.

坂東先生……そんな話、したんだ……

「そうなんだよ。しまいにはみんな正座して聴いてたよ」

ふーん……

「……そしてね、ミカタくん、坂東先生はこんなこと、言ってたのよ」ずっと、黙って聴いていた梓川さんが、そう言った。

「生きていればいろんなことが起こる。柔道の初めての試合で負けた時。大きな大会で投げ技くらって観衆の面前で失神してしまった時。なにが起こっても俺の心の中には音楽が流れていた。川澄先生に失恋して、もうおしまいだと思ったはずの音楽がいつも俺といっしょにあった。歌うことはできないがいつもいっしょだったのだ。だから俺は今こうして、おまえたちの前にたっていられる」

……………

で、最後にこう言ったんだそうだ。「『匿名希望』さん、こんなところでいいかな。さて。あと三十分あるぞ。サッカーできるぞ。さあさあ！ サッカーやるも一の、こーの指、とーまれ！！」

.....

「正座してたみんながずっこけたのはいうまでもないわ」

049.

僕が一週間も休んでる間に学校でも一週間が過ぎ、文化祭はあと十日あまりのところまで迫っていた。

病欠明けのその日、放課後のうちのクラスの練習場所は体育館だった。つまり、ステージで、本番と同じ練習ができるのだ。六時間目の数学の授業には案の定といひかなんといひかな、稲田くんは現れず、練習直前になっていそいそとやって来た。そして僕の顔を見るなり、嬉しそうに笑って言った。「ミカタ、やっと出てきたじゃん！」

今日は何回もそのセリフを言われた。どうやら、クラスの人々は、僕が文化祭音楽練習の重大な責任に押しつぶされ、世をはかなみ、ばっくれた、と求めてたらしい。

ばっくれる、ね。

まあ、クラスに対して責任なるものをほっぽりだしたところで、ミカタだもんな、って思われるのがオチだ。僕はずっとそういうやつだったんだから。けど、安部先生に対してそれはできないと思ったんだ。安部先生と、それから梓川さんをはっきりさせたくかった。だからどんなかこわるいことになっても、とにかく最後までやり通したかった。二年B組を文化祭のステージに乗っけて、演奏をまっとうする、それが僕の使命だ。そう決めたんだ。

昨日、散歩と称して梓川さんを家まで送り届け、次に春奈を家までへ送りつつ、いろいろ、話した。春奈は、稲田くんと木村グループのことは、クラスの様子からしてあたしたちしか知らないと思う、と言った。もっとも、稲田くんが自分で言いふらさない限りは、という条件つきで。

じゃあ、稲田くんはなんで春奈と僕にあっさりとしやべったんだ？

「話をふったのはあたしだったけど、あの時ね、稲田くんはミカタを見てた。ミカタだからしやべったんだと思う。ミカタに聴いて欲しかったんだよ」

え——

「あたしはミカタのオマケ」と、春奈はさらっと言った。

.....

「稲田-木村グループのことはあたしは誰にも言わない。坂東の話聴いて、やっぱり誰にも言えないって思ったんだ。稲田くんは謝られたって許さないって言ってるし、一方の木村くんたちに、今のお気持ちは？ なんて聞けないから、推測でしかないけど、自分たちみんなで謝ったのになんで許してもらえないんだって思ってるだろうね」

.....そうだよな

「あたしは、稲田くんの気持ちも本当だし、木村くんたちが謝ったのも本当だし、なのに許されない、そんなのおかしい、っていうのも本当だと思う。みんな、本当なんだよ」

.....

「稲田くんも、木村くんたちも、どっちも間違っていない、どっちも正しいんだよ.....ごめん、なんか涙が.....だから.....ここで、稲田くんがさ、『わかった木村くん、全部なかったことにしよう。今日から仲良くしよう』なんてったら、ナオトくんへの気持ちはどうなるんだってなるし、木村くんが『ごめんで言ってるのに許さないってどういうことだ。よしもっといじめてやる』なんてったら、じゃあ謝るっていうのはウソ？ ってことになるよ」

.....つらいよな、きっと、どっちも

「うん……坂東みたいに四十年も引きずってるのも信じらんないけど、でも、ひとを傷つけるってそういうことなんだよ」

坂東先生のお父さん、心労で亡くなっちゃったんだっけ？

「話が本当ならそういうことだよ」

……たまんないな

「うん……」

それから僕たちはそれぞれ物思いに沈んで、黙って歩いた。稲刈りが終わった田んぼの空は夕焼けで赤く、こおろぎがコロコロコロコロと鳴いていた。

白い森のカーニバル

♪♪♪ 真冬の真っ白い森に黒い音符たちが集まって来た。暇をもてあました音符たちは自己紹介をしようということになった。自己紹介しているうちはよかったが、いつの間にかおかしいことになっていく。ほかの音符を引き合いにだして自分がどんなにいい仕事をしているか、とか、それを聞いた別の音符がひねくれてしまったり、とか。

すると演奏記号までがやって来て、みんなをなだめようとする者、オクターブ上げたり下げたりひっかき回す者、もっとやれと煽る者。静かだった森は音符と演奏記号のやり放題で大混乱になる。

とうとう、森の神さまが怒った。静かに眠っている者もいるというのに、なんという騒がしさだ！ 冬の神さまも怒った。まったくだ！ こんな騒々しさは冬にふさわしくない！ みんな出て行け！！

森は猛吹雪になり、音符も記号も吹き飛ばされ、雪に埋もれて凍りついてしまう。生きのびた八分音符はひとりになってようやく気がつく。ひとりでは音楽にならないことに。

八分音符が泣き出す。それを聞きつけてやって来た八分休符が慰める。するとリズムが生まれた。

ほかの者も息を吹き返し、リズムに加わる。

風の神さまがそうっと五線譜の風を吹かせた。音符たちは五線譜の風に乗ってメロディを作る。五線譜の風は二つ三つと増えていき、重なって、ハーモニーになっていく。

音符たちも、記号たちも、互いの無事を喜び合った。深い雪に埋もれてしまった森の中を、極彩色になって元気に行進する。

「でもね、今は冬なんだよ」誰かがいうと、楽しい音楽は少しずつ静かになって、極彩色から元の黒い色に戻って、やがて森の奥へ消えていく ♪♪♪

050.

本番までに本番と同じ条件で練習できる時間はごく限られている。一週間休んでたやつが言えた義理じゃないが、なにしろ時間ももったいない。時間厳守。忘れ物はないように。ステージに上がって楽器ごとの立ち位置を調整して覚えてもらって。すぐに練習に入る。今更だがメトロノームをピアノの上に置いた。

このリズムに、全員、集中して。とにかく、一度、通しで合わせてみよう。

柄じゃあないが、タクトを振る。安部先生のところで音源を聴きながら予行練習はしてある。じっさい、演奏者と向き合って指揮するのは初めてではあるが、照れてる余裕もためらう余裕もない。やるしかないんだ。集中しろ、と言いつけさせる。自分に。みんなに。

鉄琴の音に、小太鼓が一台、二台、鍵盤ハーモニカが一台、二台と重なって……クレシェンド、シンバル！

小太鼓三台目、鍵盤ハーモニカ三台目に木琴が二台合わさって盛大に前奏！ もう一回シンバル！

ピアノ！ 歌が始まる。ソプラノとかアルトに分かれてない、斉唱だ。歌と合奏と両方が引き立つようにシンプルな斉唱にしたのだ。歌のバックに粘りのある鍵盤ハーモニカがメロディを、細いけどしっかりしたリコーダーが鍵盤ハーモニカになんていうか、かわいい色をつけてるといふか。木琴の硬いトレモロもかわいい。

シンバル！

大太鼓！

トライアングル！

ちゃんとアクセントつけて！

メロディ合わせるところは一音ずつはっきり！

叩きっぱなしの小太鼓がんばれ。集中して。気を抜くな。最後の部分、もう一回前奏と同じ小節に戻って。楽器が一台、一台と消え、最後は鍵盤ハーモニカ一台と鉄琴の余韻……

……なんだよ……これ……

体育館の入り口のところで、誰かが拍手してる。

「すごい！」

「なんだったの！？ 今の！？」

「模範演奏とおんなじじゃん！？」

「し、信じらんない！」

「今の、おれらが演奏したんか！？」

「まじかよー」

「うわー」

「やばくね？」

「いやいやいやいや」

「ミカタがノってたんだよ」

「そうだ、ミカタ、おまえ指揮するのか踊るのかどっちかにしろよ！」

——は

僕が欠席してる間、朝のホームルーム、給食の時、帰りのホームルームと、練習のほかに一日最低三回は模範演奏のCDを教室で流してたんだそうだ。梓川さんの提案で。曲のイメージは、かくあるべしと、みんなの中に出来上がっていたのである。

体育館の入り口で拍手してた百地先生がなんか言ってる。

——ぶらぼー！！

気をよくして再度挑戦してみた二度目の演奏は……さっぱりだった。

三度、四度、と試してみたが最初の完成度には程遠かった。鍵盤ハーモニカの音が大きすぎたり、リコーダーが音を間違えたり。それぞれ三人ずつという少ない人数なので、一人の出来具合が目立ってしまうのである。

最初のは、緊張から生まれたまぐれ、というやつだったかもしれない。誰からともなく、パートごとに徹底的に練習し直そうということになった。目標はある。あの演奏をもう一度、だ。まぐれとはいえ、一度は完成品ができたんだから、もう一度できるはずなんだ。必ずできるはずだ。みんなの目の色が変わってきた。

ふと気がつくと、富永くんが打楽器の中心にいる。

「小太鼓の三拍目とシンバルを合わせて、大太鼓ここは元気に！ もっと元気に！ トライアングルもっと控えめに。もっとかわいく、もっと優しく！ そう！ そう！！」

曲を決める時もじつは、難儀した。そもそも歌も合奏もつてのが意外と難しかった。春奈や鈴華、梓川さんとかと頭突き合わせて探してみたけど、なんだかいまいちなんだ。みんなで突き合わせた頭を抱えてたら富永くんがやって来て、「これなんかどう？」と教えてくれたのが『白い森のカーニバル』だった。

みんな、「あ！ これ！」と、ぴんと来た。ある長編アニメーション映画の主題歌だった。中学生じゃなくても、小さい子でも大人でも知ってるってくらい、映画も曲もヒットしたやつだ。

富永くんは教えてくれただけあって、この曲が好きで、その上、造形が深かった。音源はいやというほど聴きこんでいるし、歌の歌詞も全部知ってる。僕なんかよりずっとよく知ってるんだ。だから富永くんのレクチャーはすごく参考になるし役に立つ。

休憩の時に木村くんが言った。「ミカタは、楽しそうだなあ」

楽しそうに見える？ 僕は夢中で真剣なだけだよ

「ミカタのセリフとは思えない」

うん。自分でもそう思うよ

木村くんは独り言みたいに、そうだなー、意外とおもしろいよなーとつぶやいた。音楽のことかもしれないし僕のことかもしれない。

ただ、僕は、ずっと面白くもおかしくもないって顔で、いやむしろこわばった顔で、なんだかムキになって小太鼓叩いてた風の木村くんがそんなことをつぶやいたのが嬉しかった。

僕が、あと少し、もうちょっと頑張ろう、と言うと、木村くんは「……おう」と応えた。それから「おーいおまえらー。もうちょいやるぞー」と、周りで休んでる面々に声をかけた。稲田くんは黙って立ち上がった。

相手の音を聴いて、自分の音を出して、ひとつの音楽を作る。音楽の一部になる。練習しよう。いい演奏をしよう。音楽の一部になろう。傷つけられ、傷ついたとしても、ひとりぼっちでも。彼らが抱えてる問題は彼ら自身の問題で、はたでどうにかできることじゃないけど、同じリズムとメロディにのってできあがっていくハーモニーが、音楽が、何かを変える。そんな気がする。

鉄琴の澄んだ音で静かに始まる。慎重にいけよ、影浦くん、この繊細な出だしにみんなが聞き耳を立てる。鍵盤ハーモニカがひとつ、またひとつ、小さな音で加わり、小太鼓も小さく、リズムを叩く。定員三名に九人も手をあげた小太鼓だ。厳正なあみだくじで当たったきみらは選ばれし者だ！

鍵盤ハーモニカのメロディ、クレッシェンド、うわあああ、と音も気分も駆け上がったところで、じゃああん。高木くんのシンバル！ いいぞ！ ここからが前奏だ。鍵盤ハーモニカが主旋律を、そこへ木琴二台が軽やかな音を飾り、シンバルのアクセント、さらにリコーダーの細い澄んだ音が躍る。梓川さんのピアノが加わって、さあ、歌だ。聴いている人に伝わるように言葉をはっきり、発音は正確に。

鍵盤ハーモニカやリコーダーは誰でも持ってる、手持ちのやつだ。音楽室から借りなきゃならないのはできるだけ少なくした。練習時間をとにかくたくさん確保するためにそういう楽器の構成にした。だから打楽器は練習が限られてたんだが……みんな、いい仕事してる。頑張ってる！

指揮するのか踊るのか、どっちかにしろって声があるが。どっちだっていいじゃん、おんなじようなもんじゃん。要は、みんながひとつになればいいんだろ？ ほら、聴いてる方もおとなしくしてない、手拍子が始まっちゃった。

さあ。吹いて叩いて歌って、踊っちゃえ！ 音楽って、幸せで——気持ちがいい——

052.

「あの、つかぬことを伺いますけれども……」

『クラス対抗・音楽コンクール』のすべての演奏が終わり、会場の体育館にはまだ興奮の余韻が残っている。生徒たちの明るい声がさんざめく中、並べられた一番うしろの席でプログラムを手にひとり物思いにひたっている風情の老婦人に、その女性はおずおずと声をかけた。

老婦人は優雅に頭を動かして相手を見た。背の高い、知的な目をした女性を。彼女は身をかがめてささやいてきた。

「人違いでしたら申し訳ありません、もしや、川澄先生では……」

「いいえ……」

「……それはどうも……失礼しました……」

「あなた、ヨシコさん？」

* * * * *

「昔、中学の教師をしていたころ、川澄という姓だったことはあります。夫だった人の姓です。彼は交通事故であっけなく他界してしまい、私はそのショックで授かったばかりのおなかの赤ちゃんまで……失意と体をこわしたのと。とつぜん学校を辞めたのはそういうことだったのです。そのあと、安部という、もともとの姓に戻りました。それからもう仕事一筋だったわ……」

ヨシコさんは目を見開き、頭のなかで(ぎゃあ)と叫んでいた。中学のとき流れていた噂話と、かなり違うじゃないのよ！ と。

「あれからもう四十年もたちますかしら、あなたも立派になられて」

四十年前、中学二年の夏休みの前日。あの噂話を信じたわけでも信じないわけでもなかったけれど、そのまんま、ひとりの少年に受け売りの記憶がヨシコさんにはある。あわてた様子で「いえいえ」と立てた手のひらを振りぺこぺこ頭を下げるヨシコさんを、安部先生の方はをきょんととして眺めている。

「そ、それはそうと、川、いえ、安部先生、坂東くんを覚えてらっしゃいますか？」

「坂東くん……ああ！ 幸太郎くん、ダビデ幸太郎くんね、覚えてますとも！」

「……なんですかその、ダビデって。プロレスのリングネームみたいな」

おほほ！ と先生は声を立てて笑った。「坂東くんのクリスチャンネームですよ、あらいけない！ これは坂東くんと私とふたりだけの秘密だったのに！ ヨシコさんお願い！ だれにも言わないで！」

「わかりました、だれにも言いません、夫の秘密は」

053.

で、二年B組は優勝できたのか、って？ 僕らの演奏の最後のとこ、まず女子の歌声が消え、楽器パートの音がひとつずつ消え、リコーダーが息の続く限り頑張り、始まった時と同じように鉄琴が静かに静かに曲を終わらせる。そりゃもうばっちり決めて、礼をする前にみんなでガッツポーズなんかしちゃった日には、優勝できようができませんが、どうでもよくなっていた。

楽しかったね。

うん。

それがすべてだった。

梓川さんと僕は、体育館のいちばん後ろの席に安部先生を見つけた。観に来てくれたんだ！ お礼を言いに行こう！ 先生からは梓川さんも、僕も、いろんな、きびしいアドバイスをもらったんだ。

だけど、あれ？ 誰かと話しておられる。知らない女のひとと、坂東先生と？ なんて三人で泣いてるんだ？

安部先生は僕らに気づいて、泣きながら笑った。「素晴らしい演奏でした！ 頑張ったわね！
えらいわ！」

えへへ

「ほら、ミカタくん。安部先生はさいごにはかならず褒めてくださるのよ！」

二年B組は嫌がる松井春奈をよってたかって胴上げし、文化祭は終わった。

* * * * *

それからしばらくして梓川さんと僕に、安部先生からハガキが届いた。

拝啓

小春日和の今日このころ

皆様にはお元気で過ごしてのこととぞんじます

さて、このたび縁あって左記へ転居いたしました

お近くにおいでの際はぜひともお立ちよりくださいませ

敬具

十一月吉日

荒山新町三丁目四の五

坂東幸太郎方

安部満里子

おわり

あとがき

電子書籍デビュー作。2015年ごろの作で、対象読者は小学校高学年から中学生、主人公はたよりない男子中学生とクラスメイトたち、音楽、軽くて重い、そんな感じ。筆者は個人的に中学時代や音楽、学生という団体の生活のなかでの音楽に良い思い出がありません。むしろ思い出すのも苦痛な経験と結びついていたりします。だから好きな楽曲をひとりで聴くのはまだしも、歌うなんてとんでもなかった。筆者にとって音楽とは、長いことそういうものでした。ところが、永遠も半ばを過ぎたある日、読書の途中でこんな一文に出会ったのです。

『みずからをくフィロソフォス>(知を愛するもの)と名乗り、すべてはリズムであるとの観点から「数」「宗教」「音楽」との根源的な統一性をいちやく洞察した』、その人の名は、ピュタゴラス。

音楽によって、泣いたり笑ったり浮かんだり沈んだり、さまざまな感情を覚え、雰囲気を感じ、体験する。それらはリズムやメロディ、ハーモニーによってであって、リズムや音階は数値化できるものなのです。また、ドレミファソラシの七音それぞれの周波数が虹の七色の周波数に対応しています。(ということから拙著『童話的世界・七人の妖精のぼうけん』が生まれました。)

それにしても、なぜなのでしょう。

古代(ピュタゴラスよりずっと前)、すべてが幾何学的な形や音による複雑な言語を介して伝えられたといいます。古代ギリシャで燦然と花開いた恐ろしく高度な学問はその残照のようなものなのだ、と。目が眩む話ですね。

ピュタゴラスをはじめ、アリストテレスやプラトンといった古代ギリシャの名だたる哲学者たちも、ゲーテやライプニッツといった近世の芸術家や数学者たちも、音楽について頭を悩ませていました。耳で聴き、喉や手で演奏することは音楽のほんの一面にすぎないのかもしれませんが。鑑賞したり自ら演奏し、感動を覚える。そういった、音楽を『体験』した時の言葉にしがたい感覚は、単に肉体の体験ではないから、なのかもしれません。

本作は(一応)小中学生向けということもあり、あまり抽象的なことは取り入れていませんが、筆者にとって苦痛でしかなかった音楽、創作の上でつき合うきっかけになったのがフィロソフォス・ピュタゴラスの音楽と数学との関係だったことに思い至ると、なんともふしぎな気持ちになります。いろんな分野の本を読んでみるものですね。

さて、作中で安部先生が合唱について思い切った見解を述べられていますが、変声期中の男子が所属団体のために無理に歌うことについての個人的な見解であります。合唱そのものについてのことではありませんので、念のため。

ミカタくんたちが演奏している曲は某有名グループ様のもので、PCで何時間も鳴らしっぱなしにして練習場面を書きましたっけ。ほんとにいい曲なので電子書籍ファイルに音楽ファイルを貼り付けたいところですが、まあ、そうもいきませんし、既成曲のタイトルをそのまま使うわけにいかないの

で、作中の『白い森のカーニバル』はタイトルとストーリーはオリジナルです。が、読みながら『あの曲』をイメージしていただけたら幸いです。

思いのほか、長文のあとがきとなってしまいました。本編ともども、お読みいただきまして、ありがとうございました。心から感謝いたします。

2020年 8月 峯村 明

みんなのミカタ

2024年11月10日 第四版発行

著者 表紙 素材 峯村 明 E-mail

表紙 素材

「いらすとや」<https://www.irasutoya.com/>

挿絵 minemura family

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
